

暗約領域  
新宿鮫  
XI

装丁 泉沢光雄

写真 Daniel Hernandez Ramos / Moment / Getty Images

Immanuel Sony / EyeEm / Getty Images

密告をしてきたのは浦田うらたという密売人だった。根っからのクスリ好きで、酒は体質に合わない。少しでも飲むと頭が痛くなり心臓がぼくぼくして具合が悪くなるのだと、二度目の逮捕のときに鮫島さめじまに話した。

覚せい剤中毒者には、そうした下戸げこが少なくない。かつてトルエンなどの有機溶剤中毒になるのも、一滴も酒が飲めないという若者が多かった。

酒盛りをして気持よくなるなら、「アンパン」なんてやらねえよ、というのだ。コンビニや自販機で買える快樂とは縁がないから、自分はトルエンに走るのだ、と。

動機は理解できなくもない。酔って憂さを晴らしたり、仲間との絆を確かめあうことは誰にでもあ。だが飲めない者はそれができない。

だからといってしゃぶや違法薬物に手をだせば、転落が待っている。正業をもちクスリ代に事欠かない稼ぎが続けばまだしも、そうでなかったら即、売人のできあがりだ。クスリを卸す連中おろも、もちろんそのあたりのことはわかっている。

十パケぶんの代金で十一パケと交換だ。かつて「コーヒーチケット」というのが町の喫茶店にはあって、十杯ぶんの料金で十一杯ぶんのチケットが買えた。どちらが先かはわからないが、もしかしたらクスリの売人システムを喫茶店が真似たのじゃないかと鮫島は思ったものだ。なぜかという、大昔、コーヒーとクスリの両方を売っている喫茶店があったからだ。店主は足を洗ったやくざで、女房に店をやらせながら、常連客にしやぶやへロインを売っていた。

いずれにしても売人のなりてはいくらでもいる。売人が売人を育てるといってもいい。

十パケを売れば、自分の一パケがただになることを知った売人は、仲間にクスリを売り、それをさらに売人に仕立てる。卸しはそのあたりをわかっている。百パケぶんの金をだすなら、百十パケではなく百二十パケをサービスする。ただの二十パケを仲間に安く卸せば、売人兼卸しに格上げだ。そうしてまるでネズミ講のように卸しと売人のシステムが広がっていく。売人はパクられても、自分への卸ししか知らない。その卸しはすぐ上の卸ししか知らず、えんえんとたぐっていくのは困難だ。

それだけ卸しや売人が増えると、当然、競争も激しくなる。しゃぶ中イコール売人ということになったら、商売あがったりだ。

客と店舗の数が同じだったら、あたり前の話、皆、潰れてしまふ。

そこでよその店舗を密告ちっくりするというわけだ。それもできるだけ、扱っている品数の多い店舗がいい。百や二百くらいを売っている売人より、千単位のタネを小分けにしている卸しを摘発してもらえば、売人の商売敵がたきを一度に何人も潰せる。地元の大きな卸しが潰れると、一時的に品薄になるので、値上げもできて一石二鳥にもなる。

以前、数千単位のパケを小分けにする卸しを密告した売人がいた。ガサが入って、これで商売敵が減ったと喜んでいたら、自分の卸しの卸しもそこからタネを仕入れていて、商売ができなくなったという笑い話がある。

浦田が知らせてきたのは、北新宿四丁目のマンションの一室が卸しの仕分けと売人との取引に使われているという情報だった。

建物の名はK S J マンション、四階建てでエレベーターのない古い建物で、調べたところ築三十八年が経過している。

「タネを卸しているのは榮勇会えいゆうを破門になった阿曾あそって野郎で、おそらく現役連中がこっさり回してやってるんだと思うんです。ほら、このごろはどこの組でも現役がクスリさわるのにうるさいじゃないですか」

管内を外し、中野駅前の居酒屋で午後八時に会った浦田はいった。携帯に電話をかけてきて会いたいといわれたときから、密告だろうと鮫島は見当をつけていた。浦田は五十代の初めで、年齢のわりに白髪の多い頭を短く刈っている。バイク乗りが好むような革ジャンにごついブーツをはいているが、愛車は宇都宮ナンバーの軽ワゴンだ。盛り場にいる県外ナンバーが職務質問の標的にされやすいことを長いあいだ知らずにいた。もっとも自分の車でブーツを運ぶほど馬鹿ではない。

「ものは何だ？」

「冷たいのがほとんどで、あとは錠剤と葉っぱがオーダーがあると入るらしいです」

「パケか？」

鮫島が訊ねると浦田は頷うなずいた。

「今どきパケなんて流行らないと思うでしょう。それが最近また増えてんですよ。錠剤のパチもんが出回っちゃってるんで。中国製の偽もんがやたら多いらしくて。しかもただの小麦粉とかに色をつけただ奴ならともかく、飲むと腹壊すってんだから、いったい何で作ってるんだか」

MDMAにとどまらず、覚せい剤成分であるメタンフェタミンやアンフェタミンを含んだ錠剤が世界的に出回っている。化学物質なので合成や成形が容易で、保管や運搬に手間がかからないからだ。アメリカでもコカインを上回る勢いだという。

「腹を壊すくらいですむなら、そのほうがまだ」

「勘弁して下さいよ。パチもん売ったら、それでアウトなのだから」

浦田が泣きそうな顔をしたので、鮫島は気づいた。中国製の偽ものをつかまされたのは浦田なのだ。そのせいで客が離れ、あせっている。そこで密告を思いついたのだろう。

「なぜ俺なんだ？」

浦田から密告をうけたことはなかった。薬物捜査ではあたり前の「エス」を用いる捜査が、鮫島は嫌いだった。「エス」を使うくらいなら、地道に売人をたぐっていくほうがいい。

「栄勇会とつながっていない人は、鮫島さんくらいしか思いつかなかったからですよ。いや、勘ちがいしないで下さい——」

鮫島の表情が険しくなったので、浦田はあわてていった。

「別に新宿の誰かが仲よしだってわけじゃないんです。鮫島さんなら、絶対筋者と仲よくしないじゃないですか。それに課長だし」

「課長じゃない。代理だ」

「なるんでしよう、課長に」

「ならない」

首をふり、鮫島は話題をかえた。

「小分けをやる日は決まっているのか」

スマホのアプリで浦田のいうマンションを検索した。写真では赤茶色の外観で、一階は二台分のコインパーキングになっていて、入口はオートロックではなさそうだ。意外だった。犯罪者はオートロックの建物を使ったがる。

「決めてはいないと思います。ガサかけられちゃマズいんで。でも一週間か十日に一度は必ず集まってる筈なんで、張ってりゃわかるんじゃないですか」

「部屋を借りている人間を知っているか」

「それが、賃貸じゃないみたいなんです」

「分譲ということか？」

「いや、そうじゃなくて、ホテルみたいに部屋を貸す——」

「民泊か」

「それです、それ」

浦田は勢いよく頷いた。鮫島は息を吐いた。新宿区は渋谷区と並んで民泊物件が多いといわれている。都心部ながら、築年数の古い小規模なマンションやアパートが多いからだ。

平成二十九年に公布された「住宅宿泊事業法」により、民泊業者に対する届出等（届け）が義務づけられた。

しかし、「住宅宿泊事業法」では年間百八十日以内の営業の制限があることから、旅館業法で定める「簡易宿所営業」で許可を取得している民泊業者も多い。

簡易宿所とは、通常、四部屋までの施設で二段ベッドなどの階層寝台をおくものとされているが、民泊施設によってはホテルの客室かと思紛うような改装を施されたところもある。一方で、清掃もほとんどおこなわれず、ノミやダニが繁殖しているような劣悪な部屋もある。

結局は、使う側の問題であり、責任ということだ。宿泊客はインターネットで部屋を捜し、立地や値段で選択する。その業者が届出し許可をうけているかどうかは考えない。

重要なのは「使い勝手」だ。客の大半は外国人で、中・長期の滞在を目的としてホテルや旅館より安価な民泊を選択する。

中には自ら外国人をもてなし交流しようという民泊業者もいる。そういうところでは業者と宿泊客

が顔を合わせるから問題はおこりにくい。

インターネットでの申し込みを受け、あとは鍵を渡すだけという業者の中には、無許可の民泊業者、いわゆる「ヤミ民泊」が多く含まれている。

そしてそうならば「使い勝手」がよりよくなる、という宿泊客がいる。犯罪者だ。パスポートの提示を求められることもないか、あってもメールで写真を送るだけなら、いくらでも偽装が可能だ。鍵の受け渡し方法によっては、業者と一度も顔を合わせることなく部屋を利用できる。

外国人にとって、ちまちまとした日本の住宅地はわかりにくく、案内なしでは民泊施設にたどりつけなかったのが、今ではスマートホンのアプリで地図と現在地を照合できるので、道に迷うことも少ない。

部屋の扉が通常の鍵ではなく番号入り式になっていれば、鍵の受け渡しすら必要ない。業者はメールで開錠番号を送信し、期間を過ぎたら、番号を変更するだけですむ。

こうした便利なシステムに犯罪者が喰いつかない筈はない。

「住宅宿泊事業の適正な運営を確保し、区民の生活環境の悪化を防止する」ことを目的として新宿区は独自のルールを制定している。

それによれば、金曜日の正午から月曜日の正午までの七十二時間以外は、住宅専用地域における民泊営業が禁じられている。つまり週末のみの営業ということだ。

だがヤミの民泊業者にとっては、そんなことはおかまいなしだ。客がいて金を払ってくれるなら、いくらでもどうぞというわけだ。古いマンションのワンフロアやアパートの一棟がそうした業者に使われていたら、他の住人から苦情のでる心配もない。

また住人がいても、そうした古いマンションやアパートは高齢者が多い。民泊については知ってい

でも「新宿区ルール」は知らなかったりする。

さらに苦情をどこにもちこむのか。業者はその場にはいない。区役所か警察ということになる。実際、民泊に関するトラブルの届出件数は増える一方で、地域課はてんてこまいだ。

「ヤミだな」

鮫島はつぶやいた。

民泊業者を検索すると、トップには申請をし観光庁長官の登録をうけた代行サービス業者があがってくる。「遊んでいる部屋」を金に換えたいという「ホスト」と宿泊客である「ゲスト」のあいだをとりもつ業者だ。

宿泊客の募集、鍵の受け渡し、さらには清掃などを宿泊料金の十五から三十パーセントほどで代行するらしい。

代行サービス業者の中には、預かる部屋の多さを信頼の証しとして、大手と呼ばれる会社も存在する。

この代行サービス業者にも「ヤミの大手」があるのではないかと、鮫島は考えていた。

暴力団排除条例によって、飲食店の経営や金融業はもちろんのこと、あらゆる事業から暴力団の構成員が締めだされている。

干上がり、組を解散したり足を洗わざるをえなくなっている者も多い。「反社会勢力」というレッテルを貼られれば、銀行口座もひらけない。罰則は、取引や契約をした側にも適用されるため、部屋を借りたり携帯電話をもつことすらままならない。

とはいえ、ある道を塞がれれば、新たな道を開く者が必ずいるのも、暴力団のしぶとさだ。

薬物がその代表だが、法で規制されない、いわゆる「合法ドラッグ」の時代は、カタギや半グレが

扱っていたのが、規制がかかり禁止されたとたんに、暴力団の独壇場となる。

つかまりたくないからと法のギリギリを商売にするカタギや半グレとちがひ、暴力団は法を犯すことを恐れない。

薬物に限らず、規制をうけていても需要のある物品や行為はすべて、彼らのシノギの対象たりえる。

民泊事業に届出、許可が必要となるのは当然の流れではあるが、その一方でヤミの民泊というシノギの手段を生んだのも事実だ。

元来、不動産、建設、金融という業種からむのは、暴力団が得意とするところだ。不動産は地上げや取引への介入、建設は資材や人員の確保、金融は非合法の貸金である。

そういった点で、暴力団にとってヤミの民泊事業ほど参入しやすい「業種」はない、と鮫島は考えていた。

古いマンションやアパートの確保は、縄張りをもつ彼らにとって容易だ。改装には息のかかった建設業者を使える。大手の不動産や建設業者、銀行は、暴排条例による処罰、社会的制裁を恐れて暴力団と手を切ったが、小規模の業者は、食べていくためにつながり断えずにいる。

中には、暴排条例で追いつめられた暴力団の弱みにつけこんでいるカタギもいる。偽名による取引に応じ、高額の手数料を得るのだ。暴力団に利用されているのではなく、金儲けに利用しているといってもいい。

かつて「フロント」「企業舎弟」といわれていた企業が、逆に暴力団を食いものにしてている。こうした状況がつづき、暴力団員の構成そのものがかわってきた。

組員として警察に把握されていない構成員の数を増やす。組員でなければ表向きはカタギである。

暴排条例の対象にはならない。

資金を提供して、彼らに飲食店、不動産、建設、金融といったカタギの事業をおこなわせ、必要なきときに利用するのだ。

組員として把握されてしまった者には、売春やドラッグ、特殊詐欺といったハナから犯罪であるシノギをやらせる。

カタギにしか見えない商売と、発覚すれば逮捕を免れられないプロの犯罪と、暴力団のシノギも二極分化が進んでいた。

鯨島の考えでは、暴力団が背景にあるヤミの民泊業者は、宿泊客にも犯罪者か、それに近い連中が多い筈だった。パスポートの提示やコピーを求めず、金さえ払えばいつでも誰でも泊めてやるという商売をしていれば、宿泊客の側にもそれが知られていく。

世界中、犯罪者ほど情報のネットワークをはりめぐらせている連中はいない。

誰がどこを仕切っているかに始まり、どの国の警察が何にうるさく、何にゆるいか。賄賂わいろが通じる部署はどこで、通じないのはどこかなどといった核心の情報から、非合法的なブツの入手法、そして滞在する側から信用できる宿泊施設の情報も出回っている。その中には当然、「安心、安全に」泊まれるヤミの民泊業者のリストもある筈だ。

鯨島自身がそうしたネットワークから情報を得られることはない。プロの犯罪者たちだけに、そのネットワークに正体を隠して入りこむのは不可能だからだ。

たとえ入りこんだとしても、やりとりは日本語ではないだろうし、暗号化された符丁が多く、とても理解できない。アメリカのFBIになら、そうしたネットワークに入りこむ技術があるかもしれないが、そのノウハウを明すことは決してないだろう。

「もちろんヤミですよ。仕分けなんかやったひにや、あとから掃除に入ったらすぐにわかりますからね。粉も多少は落ちてるし、匂いも残ってる」

浦田はいった。

「KS Jマンション全体がヤミ民泊なのか？」

「そこまではわからないっす。俺が知ってるのは、三階の『302』が使われてるってだけで」

浦田は首をふった。

ふつうに考えればネタ元（卸し元）が栄勇会を破門になった人物である以上、ヤミ民泊の経営も栄勇会である可能性は高い。

が、仕分けの現場は、こうした密告があることから、踏みこまれる危険が多い。そうなると上から下まで栄勇会がもつていかれないために、無関係の民泊業者を使っているかもしれない。かかった。

「わかった。ようすを見てみよう。うまくいけば、あなたは商売敵が潰せるというわけだ」

浦田が正直に頷いたので、鮫島は思わず苦笑した。

「ただしいっておく。あなたの情報が正しくて、そこで何かしらでたととしても、これは借りにはならない。このことで将来、俺から何かしてもらえとは思わないでくれ」

「もちろんです。鮫島さんにそんなものが通用するなんて、ハナから思っていません」

神妙な顔で頷き、氷が溶けてすっかりぬるくなったウーロン茶を浦田は飲んだ。

2

鮫島にとって夜の捜査がつづいていた。理由はふたつあった。

ひとつ目は、物理的なものだ。桃井の殉職に伴い、新宿署生活安全課の課長代理となつて、出席しなければならぬ会議がひどく増えた。

署内の会議だけではない。警視庁管内各署の生活安全課長会議、警視庁生活安全部との連絡会議等があり、さらに出席する前としたあとに報告書を求められる。

レポートの作成はさして苦にはならない。多くの現場警察官が苦手とする書類仕事を、鮫島は他人の何倍もの速さでこなすことができる。それはいわば才能で、同僚や上司を驚かせ、あきれさせてきた。キャリア出身であるからできるわけではない。キャリア警察官でも、書類仕事の苦手な人間はいらる。

会議の多くは午前中、ときには午後いっぱいも潰す。翌日は翌日で、レポートの作成がある。必然的に、捜査に使える時間は夜に限られてくる。

課長職がそこまでたいへんだとは、桃井から感じたことはなかった。何食わぬ顔で、桃井は仕事をこなしていたのだ。

ふたつ目の理由は、不眠だった。

桃井を失い、晶との関係を断つた。一人と過した時間がいかに貴重だったかを、この数カ月、鮫島は痛感していた。

寂しさは耐えられる。そう信じてはいるが、眠ろうとベッドに入ると、記憶がよみがえるのだ。

目をつぶったとたん、桃井が撃たれた瞬間の映像が浮かんでくる。スローモーションの映像が何度何度も何度も瞼の裏に浮かぶ。それを消そうと、深酒をしたり睡眠薬の助けを借りたこともあった。

だがそれはつかのまの効果しかもたらさない。眠りも浅く、短時間で目覚めてしまうのだ。そのあとやってくる自己嫌悪が強く胸を食む。

そんなとき晶を思いだした。暗い天井を見つめ、どれほど彼女に励まされてきたかを考えずにはいられない。

気づくと夜明けとなつてゐる。そうして鮫島は眠ることをあきらめた。

眠れない時間は捜査にあたればよいのだ。幸いなことに、多くの犯罪者は夜動き回る。それを監視し、証拠を集めるには、夜のほうが効率がよい。

捜査にあたつてゐる限り、桃井の死の記憶にさいなまれずにすむ。晶の不在が心を削ることもない。体重は減つたが、体の不調は感じない。動けるのなら、動いてもいいということだ。夜明け頃、ベッドに倒れこむときは、桃井がよくやつたとほめてくれるような気がした。

こんなに疲れていたら晶とのデートもできない。欠伸をかみ殺す鮫島を見たら、烈火のごとく怒るに決まつてゐる。だから会わないでゐるほうが互いのためだ。

いいわけをして、目を閉じる。それでも目覚ましは必要ない。二、三時間もすれば眠りが終わる。疲れは少し残つてゐるが、自己嫌悪はなかつた。

どこまで体が保つかはわからない。が、可能な限り、夜の捜査をつづけようと鮫島は決めていた。

浦田と別れたその足で、鮫島は北新宿に向かつた。すぐに何かを得られるとは思わないが、監視対象に気づかれない限りは、頻繁に足を運ぶことが必要だ。

一週間か十日に一度おこなわれる小分けがいつなのかは不明だ。つきとめるには足繁く通う他ない。できれば、近隣の空き部屋を見つけ、監視拠点として確保したい。

大量の覚せい剤を運びこむ小分け日は、当然、警察の張り込みを警戒する。その日は朝から見慣れない人や車が周辺にいないか、チェックし用心する筈だ。したがって現地状況をなるべく多く知る

必要があつた。

北新宿<sup>ちやう</sup> 北側は神田川をはさんで中野区東中野、南側は西新宿となる。管内では比較的住宅が密集しており、歌舞伎町<sup>かぶきぢやう</sup> や西新宿とは雰囲気異なる静かな区域だ。北新宿四丁目<sup>よやくにん</sup> じたいは、JRだと新宿駅より、大久保、東中野駅のほうが近いが、どの駅からも四、五百メートルは離れていて、決して電車の便がよいとはいえない。

JR大久保駅で電車を降り、鮫島は徒歩でKSJマンションをめざした。

中央線の線路と小滝橋<sup>おたきばし</sup> 通り、神田川にはさまれた三角形が北新宿四丁目<sup>よやくにん</sup> で、その三角形のほぼ中心に、KSJマンションはある。

交差する一方通行路が基盤の目のように走っており、低層のビルやマンション、アパートが並んでいて、飲食店の数もさほど多くない。道路幅も狭く、長時間の路上駐車は人目を惹くにちがいがなかった。

KSJマンションはスマホのアプリ写真で見たより古さを感じさせた。そこに民泊施設があることを知らせる表示は何もない。

午後九時二十分だが、明りのついている窓はひとつもなかった。コインパーキングも空だ。

KSJマンションの前を通りすぎた鮫島は、向かいのメゾンクレストという建物に目をとめた。四階建てのマンションで各階二部屋があり、二階の右側の窓がまっ暗でカーテンもない。賃貸だとすれば、空き物件と思われた。

監視拠点としては最高の立地だ。

KSJマンションのようすをしばらくうかがい、出入りする人間や明りのつく窓がないことを確か

めて、鮫島は一階の入口をくぐった。入口の扉をくぐると、正面右手に階段、左手に郵便受けがある。ロビーといえるほどの広さもなく、防犯カメラも設置されていない。

郵便受けに歩み寄った。郵便受けは六箱ある。一階には部屋がなく、二階から四階までが各二部屋だ。どの郵便受けにもチラシがたまっていて、住人の存在を感じさせない。「302」も同じで、手袋をして開くと、中にはデリバリーのメニューがたまっていた。私信や請求書の類は一切なく、ためしに見た「201」もまるで同じだ。

KSJマンションの六部屋すべてが民泊に使われているのかもしれない。

ためしに二階に登ると、その考えがまちがっていなかったと気づいた。狭い廊下に並ぶ、二つのステイルドアには、あとづけの番号錠が設置されている。縦長の銀色の箱で、「0」から「9」までのボタンが二列、縦に並んでいる。

三階、四階と、すべてが同じ構造だった。どの部屋の扉も鍵ではなく、番号を入力して開ける仕組みだ。

KSJマンションをでた鮫島は、向かいのメゾンクレストに歩みよった。こちらの一階には、賃貸管理をおこなう不動産会社が看板をだしていた。北新宿一丁目にある「淀橋不動産」という会社だ。電話番号をメモし、鮫島はメゾンクレストをでた。

翌日の夕方、鮫島は「淀橋不動産」を訪ねた。八階建てのビルの二階と三階を使っている。すりガラスに金文字で「淀橋不動産」と書かれた扉は、老舗を思わせる。

扉を押すと、事務服を着た女性が二人、正面にすわっていて、

「いらっしやいませ」

と声をそろえていった。二人とも四十代のどこかだろう。

「お忙しいところを申しわけありません。新宿署生活安全課の者です」

身分証を提示すると、奥の席にいた眼鏡の男が立ちあがった。五十代の半ばくらいで、でっぷりと太り、生え際が後退している。

「新宿さんにはお世話になっております。何でしょう？」

新宿さんという表現が、いかにもそつがなく、鮫島は男を見直した。

「あ、私、専務の山口やまぐちと申します」

「鮫島といいます。おたくが北新宿四丁目で管理されている物件のことで、ちょっとお話をうかがいたいのですが」

「北新宿四丁目。ああ、メゾンクレストですな」

山口の反応は早かった。

「二階の向かって右側は空き部屋ですか？」

鮫島が訊ねると頷いた。

「そうですか……」

答えて山口は席を離れ、鮫島に歩みよってきた。ガラスの間仕切りでへだてた応接セットを示す。

鮫島は礼をいい、腰をおろした。向かいにすわった山口に改めて身分証を提示する。

「先にまじうかがいたいのですが、メゾンクレストの向かいにK S Jマンションという建物があります。ご存じですか」

「ええ、知ってますよ。あそこは昔、ガラス屋さんだったんです。一階が店舗で、二階に家族で住んで、三階四階を賃貸にしていたのじゃないかな。けれど親父さんが亡くなり、サラリーマンだった息子さんが賭け麻雀にはまってね……」

山口は顔をしかめた。

「いつ頃のことです？」

「そうさね、もう二十年は前だな。結局、ビルごと手離すことになって。うちもね、名乗りをあげたんです。あの辺一帯は、いずれ再開発がかかるって噂もあって」

「それで？」

山口は首をふった。

「どこか買ったのでしょうか、私たちの知る業者じゃなかったですね。地元じゃないと思います。

もしかすると……」

いいかけ、黙った。

「もしかすると？」

鮫島はうながした。山口は首をふった。

「いい加減なことはいえませんが」

声をひそめている。

「もしかすると息子さんの賭け麻雀の仲間かもしれない、とかですか」

鮫島は山口の目を見つめた。山口は視線を外した。

「まあ、そうかもしれない、というだけで」

「どこで麻雀をしていたのか、ご存じですか？」

「最初は地元の麻雀屋です。私もいつてましたが、百人町の千代田荘ってところで。もうなくなって、ビルが建っています」

「何というビルです？」

「ハチマンビルです。隣の八幡神社の土地と合わせて建てたんで」

知っていた。百人町三丁目だ。現在は退去したが、六階に兼有会けんゆうかいという小さな組の事務所があった。「その千代田荘がなくなったあと、常連に誘われて、西新宿の会員制のところに通うようになったんですよ」

「山口さんはいかれましたか」

鮫島の問いに首をふった。

「その頃からこっちに夢中になっちゃって」

ゴルフクラブを振る真似をした。

「麻雀より体にいいし、何より負けてもタカが知れてる。あ、刑事さんにこんな話しちやmazかったな」

「大丈夫です。その会員制のところの名前はご存じですか」

「『サロン』」

「サロン何ですか？」

「いや『サロン』だけです。でもそこも二、三年くらいで潰れました。筋者の客が多くて、大きな額が動いているというのが噂になったらしくて」

「サロン」という名の麻雀荘の名は聞いたことがなかった。

「暴力団関係者が多い店だったのですね」

「そりゃひと晩に百も二百も動くような麻雀を、カタギはやらんでしよう」

「百万、二百万、という金額が動いていたとおっしゃるのですか」

鮫島が確認すると山口は頷いた。

「そこでやられちゃったんですよ。それなりにうまい人でしたがね、相手はプロの博打うちだ。いくら全自動車でもイカサマができないって、勝負にならない。一年もしないうちに、使ってなかった店舗が駐車場になって、そのうち上物うわものも人手に渡った」

「麻雀の負けで土地をとられたということですか」

「その前に奥さんも子供を連れてでていっちゃってますしね」

鮫島は頷いた。

「息子さんの名前を教えてくださいませんか」

「ええとね、『呉竹くれたけガラス店』というのが屋号だったから、呉竹何とかといったな……。そうだ、呉竹ヒロシです。ヒロシはこれ」

「宏」という字を掌に書いて見せた。

「今どこにおられるかはご存じですか」

山口は首をふった。

「まったくわかりません。正直、生きていますのかどうかも」

「建物を買いとったのがどこかもご存じではない？」

山口は息を吸いこみながら頷いた。

「ええ。その後、賃貸にだすなら、うちあたりにも情報が回るだろうと見ていたんですが、しばらく手つかずでしたね」

「二階のコインパーキングも同じ地主ですか？」

「最初は息子さんが貸していたのだと思いますが、今は、さあ……。全部とられちゃったのじゃないかな」

「呉竹さん以外に、その『サロン』のメンバーだった方を誰かご存じありませんか」

「ひとりでは知っていたんですがね。同じ北新宿四丁目にあったスナックのマスターですが、その人も今はどこにいったか」

「名前は？」

「スナックが『バニシング』、マスターは確か遠藤<sup>えんどう</sup>さんていったかな。エンちゃんて、皆に呼ばれてましたから」

「遠藤何と？」

「そこまではちよつと……」

「ありがとうございます。ところでK S Jマンションが今どうなっているか、ご存じですか」

「ええ。刑事さんがいらしたのも、それが狙いでしょう？」

「それ、とは？」

「たぶん、モグリ<sup>モグリ</sup>の民泊をやっている。ちがいますか？」

「なぜモグリだと？」

「平日に人がでてくるのを見たことがあるんです。明らかに外国人で、キャリーバッグをがらがら引いてた。『新宿区ルール』<sup>なにとん</sup>にひっかかる。それを承知でやってるならモグリに決まっています」

「外国人は何人でした？」

「中国人でしょう。四、五人いましたよ。スマホいじりながら、ぞろぞろ小滝橋通りのほうに歩いていって」

「地元で噂になっているのでしょうか」

「そこまでは……。あのあたりは、元からの商売屋だと、代がわりして店を畳んじやったり、古いア

パートやマンションは外国人の入居者も多くてね。あとはお年寄りばかりだからなあ」

鮫島が頷くと、山口は訊ねた。

「で、メゾンクレストにどんな御用ですか？」

「短期間だけ、部屋をお借りできないかというお願いです。使用料は払います。ただ正規の契約というわけにはいかないのですが」

「短期というのは、どのくらいですか」

「ひと月かふた月」

「借りられる目的は？」

山口は事務的な口調になった。

「張りこみです。K S J マンションが犯罪に使用されているという情報があり、それを確かめたいのです」

山口は鮫島を見つめた。

「K S J の全部ですか。それともどこかの部屋？」

「そのことも調べたいのです」

つかのま無言だったが、山口は頷き、女性事務員に声をかけた。

「おーい、メゾンクレストの書類、もってきて」

3

署に戻った鮫島が、メゾンクレストを監視拠点として使用するための経費請求を含めた書類仕事を

終わらせたのは、午後八時を回った時刻だった。

携帯にメールが届いた。

「いるか。いるなら顔だせ」

そっけない文面は鑑識係の藪<sup>やぶ</sup>だった。鮫島はパソコンを閉じ、鑑識の部屋に向かった。

藪は二台のスマホとパソコンをデスクに並べ、何かの作業をしていた。

「やっぱりいたか」

「さっき戻って、片づけものをしていた」

答えた鮫島を、藪は見上げた。署内ではいつも薄よごれた白衣を着け、体重はどんどん増える傾向にある。

「お前のダイエット法は何だ？」

いきなり藪は訊ねた。

「ダイエット？ しちゃいない」

「じゃあ病気だな」

「どこも悪くない」

「嘘をつけ。肌もガサガサだし、目の下には隈ができてる」

「エステでもいくか」

鮫島がいうと、藪はにこりともせず頷いた。

「いいな。きれいな姉ちゃんにパックでもしてもらえ」

「冗談だよ。そんな暇も金もない」

「寝てないのか」

「暇がないんだ。会議ばかりで捜査がはかどらない」

「課長は捜査なんかしねえんだ。デスクにふんぞりかえって、ハンコついてりゃいい」

「課長じゃない。ただの代理だ」

「どっちがいい？」

藪が訊ねた。

「どっちとは？」

「課長と課長代理と」

鮫島は首をふった。

「お前に人事権があるとは知らなかった」

「どっちだ？」

真顔で藪は訊ねた。

「どっちも困る。元の遊軍に戻りたい」

鮫島が答えると、藪は椅子に大きくよりかかった。背もたれが悲鳴をあげた。

「じき戻れるみたいだぞ」

鮫島は無言で眉を吊り上げた。桃井がいなくなった今、署内で唯一、心を許せるのが藪だった。

「新しい課長が生安にくる」

「そいつはありがたい」

本音だった。

「署長と副署長は、お前を課長にしたいと具申したが、本庁の人事に却下されたらしい。新しい課長がじき本庁からくる」

「どこでそんな話を聞いた？」

署長クラスでもなければ知りようのない情報だ。

「新聞記者だよ。新宿署の定点観測記事を書いているのが中央日報にいて、そいつが本庁記者クラブのコネで聞きつけてきた。今度の課長は警視らしい」

不思議はない。近年は、大きな署の課長に警視が着任することが多い。その大半が、退官まで十年を切ったベテランノンキャリアだ。

「生安の新課長が、そんなに大きな記事になるのか」

「撃たれて殉職した生安課長の後任が、女だったらな」

「女？ 女性課長なのか」

「そうだ」

警察庁は女性警察官の採用を増やすように、警視庁、各道府県警察本部に働きかけている。

「警務部の女性活躍推進担当管理官だそうだ」

警務部にそういうセクションがあることは聞いていた。対外的にも、警察が女性にひらかれた役所であることをアピールするためだ。鮫島が黙っていると、藪はつづけた。

「女性活躍推進担当だぞ。よほど上に覚えがめでたいのだろうな。すげえ美人とか」

「だったら楽しみだ」

鮫島は苦笑した。が、すぐに笑みを消し、いった。

「課長に誰がこようと、今より仕事がしやすくなるなら、俺はかまわない。新課長をいびる気もない」

「あんたならそういうだろうと思った。だが桃井さんのようにはいかなくなる」

「それは、覚悟している。俺の居場所を認めてくれればいい」

藪は息を吐き「マルX」と書かれたマグカップからコーヒースプツた。

「何年かかった？ あんたと桃井さんがそういう仲になるのに」

「さあな。二年か三年かな」

「新課長がそこまできるといいが」

警視庁警察官で上に登る者は、通常、本庁と所轄勤務を交互にこなす。期間は長くて五、六年、短ければ一年だ。「女性活躍推進担当管理官」であった女性警視が、本心に殉職した桃井の後任にあたとすれば、それが長期間に及ぶとはとうてい考えられない。

「教えてくれた記者は、もう記事の見出しができたって喜んでた。『女性の目で見守る眠らない街』だよ」

鮫島は無言だった。桃井の殉職によって、新宿署の生活安全課の課長は空席となった。鮫島を課長代理にすえたのは、新宿署の署長だった。突然の空席を埋めるのに課員をあてるのは不自然ではない。そして異動の時期を待ち、警視庁は新課長を送りこんできた。

藪に告げた言葉に嘘はない。会議から解放され、捜査に専念できるなら、それは歓迎できる。

が、新課長が、鮫島の存在を知らされずにくるとは思えない。何かを考えている筈だ。

新宿署で鮫島が自由に動けたのは、桃井の庇護があったからだ。新課長が同じような庇護を与えてくれるとは、とうてい期待できず、むしろ逆になる可能性のほうが高い。

それならば、課長になるほうがまじだった。行動を制限する直属の上司がいらない。

警視庁には、いまだに鮫島の存在を許したくない人間がいる、ということなのだ。彼らの一番の望みは、鮫島が退職することだ。だがそんなつもりはさらさらない。警察官を辞めたら、桃井は鮫島を

許さないだろう。

「ところで、俺も頼みたいことがあった」

鮫島は藪に告げた。

「何だ」

「じゃぶの小分けをやってる部屋を張りこむ。都合よく、向かいのマンションの空き部屋を借りられてな——」

「カメラか」

最後まで聞かず藪が訊ね、鮫島は頷いた。

「いないあいだもずっと録画しておける機材が欲しい」

「今のカメラは昔とちがう。テープを入れ替える必要もない。何百時間分でもハードディスクにおさめられる」

「簡単なのか」

「俺がシステムを組んでやる」

「助かる」

「現場はどこだ？」

「北新宿四丁目だ。ヤミの民泊だと思われる」

藪はメモ用紙をひきよせた。

「部屋の位置関係は？ お前の借りた部屋との」

「借りたのは、向かいの二階で、対象の部屋は三階だ」

「カーテンは？」

「俺が借りたほうはついてない。向こうは、確かあった」

「カムフラージュがいるな」

「カムフラージュ？」

「カーテンのない部屋に三脚にすえたカメラをおくわけにいかんだろう。といって今までカーテンがなかった向かいの部屋の窓にカーテンがついたら、どう思う？ 新しい入居者がきたと考え、どんな住人が探りをいれてくる。俺がしやぶ屋ならようすを見て、場合によっちゃ、その民泊はもう使わな  
い」

その通りだ。

「どうすればいい？」

「向かいは今まで通り空き部屋だと思わせる、その上でカムフラージュしたカメラをおく。空き部屋の日当たりにもよるが、中を黒く塗った段ボールに入れてすえれば目立たなくできるかもしれん」

「日当たりがどうなのかはわからない」

「あともう一点、小分けをするときはカーテンを閉めてやるだろうから、部屋の中まで撮るのは難しいぞ」

「それはわかってる。建物に出入りする者や止まる車のナンバーをおさえられればいいんだ」  
藪は頷いた。

「俺を連れていけ。昼間がいい」

「明日は一日会議なので、明後日の午後がいい。午前の会議のあとだ」

「どうせ俺も午前中にはでてこない。何かあれば別だが」

「わかった。会議が終わったら声をかける」

鮫島がいうと、藪はじっと見つめた。

「早く帰っても眠れないんだな」

「何の話だ」

「何でもない。明後日、待ってる」

パソコンの画面に目を戻し、いった。勘のいい男だが、鮫島の心情に踏みこまないやさしさもある。この男が我を忘れるのは、珍しい銃が関係する犯罪が起こったときだけだ。

鮫島は息を吐き、鑑識の部屋をでた。

4

翌々日、昼に会議が終わると、鮫島は署長室に呼ばれた。署長と副署長がいた。副署長はキャリアで、鮫島よりも若い。

「ご苦労さまです。会議が多くて疲れませんか」

副署長はいった。

「そうですね。桃井さんがこんなに会議をこなしておられたとは知りませんでした」

鮫島がいうと、署長は笑みを浮かべた。

「きちんとやっておられたよ。報告書にはやや難があつたが、君が課長代理になってからは簡潔で要領を得たレポートなので助かっている」

「恐縮です」

署長と副署長は顔を見合わせた。

「来月、新しい課長が本庁からくる」

署長がいった。

「助かります」

鮫島が答えると沈黙が生まれた。

「捜査に専念できますから」

鮫島はつけ加えた。二人は探るような目を向けている。

「確かに会議にはでなくてすむようになるかもしれないが、新課長とうまくやってほしい」  
署長がいった。

「もちろんそのつもりです。桃井さんとは考え方の異なる方であっても、なるべく意に沿えるよう努力します」

再び沈黙があり、副署長が口を開いた。

「新しい課長は阿坂景子あさかけいこといわれる。女性で、本庁警務部の管理官です。それ以前は中野署の地域課長代理をしていらつしやいました。優秀な方だと聞いています」

「正直、女性というのは意外だったよ。桃井さんがあんなことになって、後任が女性とは。だが本庁人事部は、阿坂さんをおきたかったようだ」

署長がいったので、鮫島は頷いた。

「できる限り、サポートします」

「お願いします。たぶんあちらも、いろいろと考えて、こられるでしょう」

副署長がいった。鮫島は微笑ほほえんだ。

「わかります。私のような者の上司になるのは、決して楽しみではないでしょうから」

副署長の本音に、本音で答えた。

「阿坂警視の経歴には、非の打ちどころがない。短大をでてから奉職され、順調に経験を積んでこられた。女性ノンキャリアの、いわば星のような人だ」

署長がいった。やや皮肉がこもったような口調だった。

「そんな女性が、新宿の生安にこられる。人事としては、考えあつてのことだろうな」  
鮫島は署長を見た。

「いくつくらいの方なのです?」

「五十だそうだ。民間人と結婚していて、子供もいる」

「着任の前に挨拶にこられたら、引き会わせたいのですが」

副署長が訊ねたので、鮫島は首をふった。

「お気遣いはありますが、どうか私を特別扱いしないでください」

「そうだな。新課長をかえってやりづらくさせてしまうかもしれん」

署長がいい、副署長も頷いた。

「そうですね」

二人がいいたいことはわかった。新課長の新宿署でのやりかたに、署長や副署長は口をだせない。人選には、上層部の強い意志が働いている。鮫島の存在がそれと無関係とは考えにくい。

署長が咳ばらいをした。話は終わったということだろう。

鮫島は礼をいい、署長室をでた。

藪と待ち合わせ、覆面パトカーで北新宿に向かった。空は晴れている。

まずK S Jマンションの前を通りすぎた。コインパーキングには二台の車が止まり、満車の表示が

でている。藪がその二台のナンバーをメモした。

鮫島は三階を見上げた。どちらの部屋のカーテンも開いていて、人はいないようだ。

角を曲がったところで車を止め、二人は徒歩でK S J マンションの前に戻った。藪がメゾンクレストを見上げていった。

「日当たりは大丈夫だ。この天気であれほど暗かったら、向かいからでもカメラは見えないだろう」  
「むきだしでもか」

「いや、むきだしは駄目だ。作動ランプがカメラにはついていない。夜は逆にそのランプの光でバレルかもしれない」

二人はメゾンクレストに入った。前日の夜「淀橋不動産」で借りた鍵を使い、二階の空き部屋に入る。ドアをくぐると、用心のため、二人は身をかがめた。カーテンがないので、向かいのK S J マンションからは室内が丸見えになる。

「向こうにカーテンがあるのは、ある意味ありがたいな」

藪がいった。閉めきられていた部屋には、ほこりっぽい匂いが淀よどんでいる。

「なぜだ」

「使われているかどうか、カーテンを見りゃわかる。見てみる。二階と三階は空き部屋だが、四階の右側はカーテンが閉まっている」

藪のいう通りで、二階と三階は、内部に人がいないのを見てとれる。

「カーテンが閉まっていますが、人がいるとは限らないだろう。閉めていく客がいるかもしれない」

「客がでたあと、業者は確認のために部屋に入る筈だ。壊されたり盗まれたりしたものがないか、な。そのときカーテンと窓を一度開けて、空気を入れかえる」

藪がいったので鮫島は感心した。

「詳しいな。民泊を使ったことがあるのか」

「簡単なことだよ、ワトスン君。ビジネスホテルでも皆、同じやりかたをしている」

藪は答え、持参した望遠レンズつきのカメラで、向かいのK S Jマンションの室内を撮影した。画像をのぞきこみ、いった。

「間取りは左右同じのようだな。ワンルームで、入口の近くにユニットバスがあるタイプだ」

カメラをおろした藪は窓に近づいた。メゾンクレストの部屋はベランダがついている。窓を開け、ベランダにでた。ベランダにはエアコンの室外機がおかれ、一メートル四方のスペースもない。

「ここがいい」

室外機のかたわらにしゃがみ、藪はいった。

「ここからなら出入口をおさえられる。室内からだど、下を撮るのは難しい」

鮫島は藪のかたわらに立った。藪のいう通りだった。ベランダの手すりは壁ではなく、細いパイプを並べた造りになっていて、そのすきまからK S Jマンションの入口を撮影できそうだ。

藪は上着から巻き尺をとりだすと、ベランダの床から手すりまでの高さを測った。つづいて室外機の大きさも測り、ボールペンで掌にメモした。

「いえばメモくらいする」

鮫島はそれを見ていった。

「いや、数字だけじゃ、あとで自分がわからなくなる」

掌には図形も描きつけている。

鮫島もしゃがんだ。パイプとパイプのすきまは十センチくらいだ。レンズを近づければ、遮るもの

なくK S Jマンションの出入口や面した道路を撮影できるだろう。

目の前に藪のうなじがある。

「おい、鼻息がかかっている」

藪がいったので、鮫島は苦笑した。

「どこかから見られてたら、狭いベランダでオヤジ二人が抱きあっているとされるだろう」

「それはいったいどんな趣味だ」

立ちあがり、離れた。K S Jマンションの四階の右側の部屋のカーテンが動いたような気がした。

鮫島はベランダから部屋に戻った。計測を終えた藪も室内に戻り、掌のメモを手帳に写し直した。

鮫島はK S Jマンションの四階を見つめた。

「どうした？」

「今、四階のカーテンが動いたような気がした」

「それ見ろ。俺たちのプレイがバレたぞ」

藪はいつて、K S Jマンションに目を向けた。じっと見ていたが、

「気のせいだろう」

と首をふった。

「なら、いいが」

「もし四階で今日、小分けをやっていたら、俺たち運が悪すぎる。いや、良すぎるのか」

「良くはない。現行犯で踏みこもうにも、材料がないんだ。指をくわえて、しゃぶ屋がでていくのを

見てる他ない<sup>め</sup>

「少なくとも面は割れるさ。写真が撮れる」

カメラを示して藪はいった。

「いつ、機材が用意できる？」

「カメラとハードディスクはある。カムフラージュ用の台を段ボールで作るとして、明日の夕方までにはできる」

「わかった」

鮫島はいった。今日が小分けの日なら、下に当然見張りがいる。いないところを見ると、今日ではないだろう。だが万一を考えて、暗くなるまで、ここで張りこむつもりだ。

それを告げると藪はいった。

「毛布くらい用意しとけ。夜は冷えるぞ。エアコンを動かすわけにもいかない」

「そういえばカメラの電源は大丈夫なのか」

「もちろんバッテリーは用意する」

藪は答えて、

「じゃあ俺は署に戻る」

と玄関に向かった。鮫島は頷いた。

「よろしく頼む」

藪がでていくと、鮫島はベランダに面した床にあぐらをかいた。床はコンクリートに薄いカーペットをしいただけなので、じっとしていると冷気を感じる。窓ごしにK S J マンションの四階の窓を見つめた。

日が落ちれば、中の明りがカーテンのすきまから洩れるので、人がいたらそうとわかる筈だ。

「淀橋不動産」の山口は、わずかな謝礼金でいいといった。ただし部屋をよごさず、電気も使用しな

いでもらいたい。トイレ、水道は使ってもかまわない。

携帯が振動した。浦田だった。

「鮫島だ」

「今、大丈夫すか」

「ああ」

「どうです？」

「まだ何も見つけてない」

「あそこで小分けやつてるのはまちがいないんで」

「そう願ってるよ」

「張りこんでるんですか、もう」

浦田は声をひそめて訊ねた。

「そういうことには答えられない」

「張りこんでるんすね。さすがだ。でも、あれですよ。小分けの日は朝からしきてん（見張り役）が

張るんで、気をつけてください」

「わかった」

「俺の勘じゃ、あと四、五日以内に小分けをやる筈です。阿曾の下にいる何人かは素人に毛が生えたような奴らなんで、一度にあんまり多いブツを預けないんです。気が大きくなって、食っちゃったりするんで」

薬物中毒者とはそういうものだ。手もとに大量のクスリがあると、まるで財布に大金が入っているかのように気が大きくなる。結果、たてつづけにクスリを入れて、使い果たすか、おかしくなって病

院に運ばれる。

ネタ元は決してツケではクスリを渡さない。現金ひきかえが鉄則だ。だから使い果たすぶんには、また金になるからかまわないが、病院に運ばれたりすると、通報もありうるので警戒し、そういう素人には、いくら金を払うといわれても一度に多くを売らない。それに今回のような密告が原因で、一時的に品薄になる場合もあるので、在庫をすべてさばくようなことはほしくないものだ。大量の押収があると、手もとに十分な在庫があっても、それを理由に値上げできる。ネタ元が値上げをすれば、売人も当然値上げをする。やがて末端の中毒者がクスリ代に詰まり、犯罪に走る。

浦田が探りを入れてきたのも、鮫島による搜索・押収がいつ頃になるかを知るためだろう。市場が品薄になるのを見越し、今のうちに在庫を増やして稼ぐ気にながらない。

もつともあまり派手に在庫を増やすと、密告したのが自分だとバレるので、そこは考えてやる筈だ。クスリを扱っている連中は、密告されたからといって、わかりやすい報復はしない。すれば、自分が犯人だと宣伝するようなものだからだ。が、疑われる心配がなければ、借りを返す。たとえば、やぶの食いすぎで、いつ弾けてもおかしくないような奴がいたら、「あいつがお前を消すといってる」とささやくのだ。

覚せい剤の乱用によってひき起こされる精神病症状の典型として猜疑的傾向と妄想がある。

自分を殺そうとしている者がいる、といわれたら、それがたとえ会ったことのない人間であっても、「殺される前に殺してやる」という行動に簡単につながる。

し、やぶ、中を殺し屋に仕立てるのは容易だ。ただし、し、やぶ、中だから腕の保証はない。標的は無傷で、その家族やたまたま近くにいただけの者が被害をこうむる場合もある。が、それでも復讐や警告にはなる。密告ちやくりを入れた奴は、いつかこういう目にあう、というわけだ。

自分が密告したとバレルほどの下手を、浦田が打つことはないだろうが、このことよって鮫島に弱みを握られるのはまちがいない。

浦田が密告者であることを隠すのとひきかえに、これから情報も引く、ことが可能になる。

薬物事犯の捜査にあたる刑事や麻薬取締官が、エスを使うのは、まさにそれが理由だ。一度密告をした人間は、密告者であることを秘密にしてもらうため、さらなる密告をせざるをえなくなる。

いわば司法による脅迫だ。

鮫島はそれが嫌で、エスを使わない。浦田をエスにするのはたやすいが、向こうから情報を提供したいといつてこない限り、今後使うつもりはなかった。

日が落ちた。KSJマンション四階の、カーテンが閉じた部屋に明りがついていて、鮫島は確認した。やはりあの部屋には人がいる。

一方で、KSJマンションに出入りする者はなかった。小分けが四階でおこなわれていたとしても、鮫島と藪に気づき、息を潜めているのかもしれない。

もしそうであるなら、検査のチャンスを失ったことになる。クスリをトイレに流し、ようすを見て、小分けの連中はKSJマンションをでていく。職務質問をかけても、ブツを押さえられなければ、どうしようもなかった。

とはいえ、捜査にそんな失敗はつきものだ。尾行や張りこみに気づいたネタ元や売人はすぐにブツを処分し、拠点をかえる。追う者と追われる者、それがプロの日常だ。

だが下手を打ってしまったとしても、せめてガン首だけは押さえない、と鮫島は考えていた。むろん浦田の情報は「302」号室なので、四階には、まったく無関係の者が泊まっている可能性もある。

そうならそれで問題はない。明日、ようすを見て、カメラをすえつけるだけだ。

いずれにせよ、でていく人間の写真だけは撮りたかった。

午後十時を過ぎて、四階の部屋に動きはなかった。明りはついたままで。あるいは宿泊客が明りをつけたまま外出したのかもしれない。

K S J マンションの一階にあるコインパーキングは、今は空になっている。小分けをしている連中が、そのコインパーキングを使うとも思えない。小分け部屋が摘発されたら、たとえその場になくても、パーキングのカメラに残った映像から車をたぐられる危険があるからだ。

K S J マンションにブツをとりにくる売人は、別の駐車場に車を止めるか徒歩でくるにちがいない。もし一階のコインパーキングを使う売人がいるとすれば、ど素人もいいところだ。だが賢かったら、やぶ中や売人にはならない。そう考えると、そんな愚か者がひとりくらいはいるかもしれない。ともあれ、たとえ今夜、小分けがおこなわれているとしても、そこまでの馬鹿はいないというわけだ。

下の道からガラガラという音が聞こえ、鮫島は表をうかがった。キャリーバッグをひいた男女四人がスマホを手に話している。声高のやりとりは中国語らしい。ひとりがこちらを見上げ、鮫島は頭をひっこめた。

やがて四人はK S J マンションに入っていく、三階の右側の部屋に明りがついた。向かいあわせにふたつの二段ベッドがおかれていて、その向こうにテーブルがあるのが見えた。

ピンク色のセーターを着た女が窓に歩みより、カーテンを閉めた。カーテンの色は四階と同じだ。

三階の右側は「302」だ。鮫島は息を吐いた。喉の渴きは水道でいやしていたが、さすがに腹が減っていた。食事をすれば、眠気が襲ってくるだろう、だがベッドにもぐりこんでも、二、三時間で目が覚める。

そうならなかったで、またこの部屋にすればいい、と思った。張りこみとしては空振りになったとしても、ベッドで朝まで天井を見ているよりはましだ。

体を低くしたまま窓ぎわを離れ玄関の近くまで移動すると、背筋を伸ばした。腰に痛みがあった。ストレッチをして、体をほぐす。

明日からは食料と毛布をもってこようと決めた。部屋の外にでて、建物の中がずっと静かだったことに鮫島は気づいた。下の部屋の物音が聞こえなくても不思議はないが、上や隣からも何も聞こえなかった。

山口は、他の部屋が空いているとはいわなかった。たまたま今日に限って無人だったのかもしれない。一階の玄関をでた鮫島は早足でメゾンクレストから遠ざかった。あたりをうかがうようなことは一切しない。

角を曲がり、KSJマンションやメゾンクレストから見えない位置にきてようやく、歩く速度をゆるめた。

西武新宿駅まで歩く途中、コンビニエンスストアに寄り、食料を仕入れた。

野方のがたのマンションに帰りつくと、シャワーを浴び、あたためた弁当をパソコンの前においた。日本語の検索エンジンで、新宿の民泊業者を調べた。KSJマンションの名はなかった。

つづいて英語の検索エンジンで調べると、ヒットした。KSJマンションの外観と部屋の写真がでている。宿泊料は前払いで、口座振込みか仮想通貨による支払いが選べるようだ。宿泊費は、一部屋四名までで、一泊八千円だった。四人で泊まれば、ビジネスホテルよりはるかに安い。

運営している業者は「WTS（ウエルカムトウキョウサービス）」となっていて、宿泊の予約はホ

ームページからする仕組だ。連絡先として表示されている電話番号は十一桁の携帯電話番号だった。弁当を食べ、中国語の検索エンジンで、同様に調べた。簡体字のサイトをたどると、KSJマンションが見つかった。中国語のサイトには予約カレンダーがあつて、それによれば、今日、明日と空室があり、週末となる明後日以降三日間は満室だ。

運営している業者は、同じ「WTS」だった。表示されている携帯電話の番号もかわらない。眠げが襲つてきた。パソコンを閉じ、ベッドに入る。

目を閉じ、眠りに入ろうとつとめた。うとうとしたような気がして、時計を見ると午前二時だった。もう少し寝よう、そう決め、再び目を閉じた。

無理だった。午前三時に起きあがり、鮫島はリビングのソファに腰をおろした。電車は動いていないが、自分の車を使えばKSJマンションに向かうことができる。

コーヒーを飲み、毛布と双眼鏡、コンビニで買った食料をもち、車に乗りこんだ。引越すべきだというのはわかつていた。今のマンションには、思い出が多すぎる。だが引越しにあてる時間はない。

そうではない。引越したくないのだ。引越したとたん、思い出のすべてが分解し、雲散霧消してしまふような気がしていた。

それで何が悪い。思い出をひきずって生きるよりはマシだ。そうじゃない。思い出から逃げだす弱さが嫌なのだ。

果てのない自問自答をくり返しながら、KSJマンションの前まで来た。四階の明りは消えていた。かわりに中国人四人組が入っていった「302」の明りがついていて、車を止め、周囲に人がいないことを確かめて、毛布と食料をメゾンクレストに運びこんだ。

車は新宿警察署の駐車場に入れる。夜明け前の一番冷えこむ時間、歩いてKSJマンションに向かった。息が白い。木枯し一号が吹いたのが一昨日だ。

今年の冬は、例年より寒い、という予報がでていた。

KSJマンションの「302」号室の明りは消えている。すべての部屋がまっ暗だ。どうやら、小分けの日にはあたらなかったようだ。

鮫島は息を吐き、メゾンクレストの部屋に入った。体に毛布を巻きつけ、窓ぎわの壁に背中を預ける。

家にいるよりはるかに、落ちついた。ここなら眠れそうだ。眠ってしまったら張りこみにならないというのに。

ペットボトルの水を飲み、冷たい壁に頬を押しつけながら、鮫島は向かいのKSJマンションを見つめた。

5

さしこむ光がまぶしく、目を開いた。午前七時を過ぎている。いつのまにか眠ってしまったようだ。KSJマンションの、カーテンの閉じられた、上下ふたつの部屋を、鮫島はぼんやりと見つめた。

「302」には、中国人四人組がいる。昨夜遅く部屋に入り、午前四時頃まで起きていたようだ。彼らが観光客ならそれも理解できる。日本でこれからどう過すか、計画を話しあっていたのだろう。

その上の「402」号室は、十二時近くまでついていた明りが、午前四時には消えていた。部屋にいた者は外出したか眠ったのだ。

トイレを使い、顔を洗って、鮫島は再び窓ぎわにうづくまつた。KSJマンション一階のコインパーキングには軽のワゴンが一台止まっていた。午前四時にはなかった車だ。

午前九時に「302」号室のカーテンが開いた。昨夜も見かけたピンクのセーターを着た女が窓を開け、身をのりだすように外を見た。

鮫島は身を隠した。やがて窓の閉まる音がして、向かいをのぞくと、カーテンと窓は閉じていた。数分後、中国語が外から聞こえ、リュックを背負った四人組がKSJマンションの玄関からでてくるのが見えた。まぶしげに目を細めている。四人はスマホで地理をチェックすると、小滝橋おたきはし通りのほうに歩いていった。

鮫島は「402」号室の窓を見つめた。外が明るいのと、こちらからは逆光になるため、部屋の照明がついているかどうかはわからない。ただ、昨夜閉まっていたカーテンに、少しすきまがあるように見えた。下の部屋の女と同じように外をうかがい、そのあときつちりと閉めなかったのかもしれない。

地形と建物の形のせいで、メゾンクレストはKSJマンションより一階ぶんほど高い。そのおかげで三階の部屋は正面に、四階の部屋もまずまず見ることができるといえる。

鮫島はカメラをそのカーテンのすきまに向けた。映像を拡大し、中のようすをうかがえないか、試した。

駄目だった。暗い室内のようすまではわからない。「402」号室に人がいれば、この部屋のベランダにカメラをすえる作業が丸見えだ。「402」号室が無人と確認できるときに、作業をすべきだ。

午前十一時過ぎ、携帯に藪からのメールが届いた。機材の準備ができたことを知らせる内容だった。鮫島は、「402」に人がいる可能性があるのです、でていくまで作業ができないと返信した。

「本当にいるのか」

「カーテンが昨夜に比べ、少し開いている。中の人間が開けたんだ」

「いつ開けた？ お前が見ているときか」

「いや。少しうとうとしたんで、その間だと思う」

「そのときでていったかもしれない」

「それを考えたらキリがない。とにかく部屋が無人と確認できるまで、カメラはすえられない。いるのがネタ元の関係者だったらアウトだ」

「了解した。確認できたら連絡をくれ」

正午になった。KSJマンションを出入りする者はなかった。やがて藪からメールがきた。

「お前も調べたかもしれないが、そこは英語と簡体字、ハングル文字の民泊紹介サイトで客を勧誘している。簡体字のサイトによれば平日の予約が可能で、ルール違反のヤミ業者だというのが明らかだ。サイトに名前があがっている『WTS』という業者名に登録はなく、連絡先になっている電話番号は、プリペイド携帯のものだ」

「助かる。ありがとう」

鮫島は返信した。

午後三時に、「302」の四人が戻ってきた。いったん部屋に入ったが、五時前に再びでかけていった。

それ以外、KSJマンションに出入りする者はいなかった。あたりが暗くなった。「402」号室の明りは、今日はない。無人とも考えられるが、それなら明りを消し、でていったのは、鮫島が自宅に戻った昨夜遅くから、午前三時までのあいだということになる。

携帯が鳴った。署長だった。

「今、どちらですか？」

「北新宿で監視活動をしています」

「明日、新課長の阿坂さんが本署にこられる。その際、阿坂さんのほうから、君に挨拶をしたいといってきた」

「新課長のほうから、ですか」

「そうだ。どんな理由かはわからない。明日の午前十時に顔をだせるか？」

「うかがいます」

「よろしく頼む」

署長は告げて、電話を切った。鮫島は深呼吸した。藪にメールを打った。明朝ここを離れなければならぬので、今夜中にカメラをすえつけたい、「402」は明りが消えていて、今は無人だと思われる。

すぐに、これから向かうという返信があった。

十分とたたないうちにタクシーが下で止まり、段ボールを抱えた藪が降りた。鮫島は一階まで下りて、段ボールを受けとった。

「本当は夜、作業をしたくなかったな」

部屋に入ってきた藪はいった。暗がりの中で、段ボールからランタン形のライトをとりだし、とも点す。「ベランダは明りが無い。ライトをつけて作業をしていたら、嫌でも目立つだろう。明日の朝は何があるんだ」

「新課長が挨拶にくる。俺と話をしたいらしい」

段ボールから機材をとりだしていた藪が手を止めた。

「誰がそれをいつてきた？」

「署長だ」

「つまり署長も逆らえない流れがあるってわけだ」

「流れ？」

「新しい課長は、ただの異動じゃなく、うんと高いところにいる連中が決めたんだ。お前の上のつける重しを誰にするか、きつと知恵を絞ったんだろう」

鮫島は首をふった。

「上はもう、俺のことをそんなに気にしちやいない」

「どうかな」

「そうさ。追いだす価値もない、と思ってる」

「それならなぜお前を課長にしなかったんだ？ 誰にも手間がかからない人事だったってのに」

「それは——、俺がその器じゃないと思っただのだろう」

「そんなわけ、ないだろう」

怒ったように藪はいい、段ボールからカメラをとりだした。コードで小さな箱とつながっている。無言で窓を開けると、ベランダにでた。

「このライトで俺の手もとを照らしてくれ」

ジャケットから小型のマグライトをとりだし、鮫島に渡した。鮫島が言葉にしたがうと、カメラの電源を入れ、モニターをのぞきながら、すえつける角度を確かめた。

「部屋より建物に出入りする人間の絵をおさえないんだな」

背中を向けたまま訊いてくる。

「そうだ。できれば建物の前に止まる車のナンバーも撮りたい」

「それは大丈夫だ」

「暗くてもか」

「高感度だから、映像を解析すれば、たいていのものはわかる筈だ。よし、段ボールをこっちへもってきてくれ」

鮫島はマグライトを口にくわえ、段ボールを窓ぎわに運んだ。藪が、エアコンの室外機のかたわらに段ボールをおき、中にカメラを入れる。段ボールには、レンズの大きさの穴が開けられていて、それを手すりのパイプぎりぎりまで近づけた。

「さて、ここからだ」

藪はいつて、腹這いになった。上半身をベランダにつきだし、レンズとは反対側に開けた段ボールの穴から、カメラのモニターをのぞきこむ。カメラを段ボールの底においた小型の三脚に固定し、その角度の調整を始めた。段ボールの穴と手すり、撮影するアングルの関係がなかなかうまくいかず、唸り声をたてている。鮫島はその間、やることもなく、部屋の中で待った。

ようやく調整が完了した。藪はまるで爆発物から身を遠ざけるように、慎重にベランダからあとじさった。

「やっとだ。地震がこないことを祈れよ。ぐらっときたら、台無しになっちまう」

「もう撮影は始めてるのか」

「これからだ」

いつて、藪は小型のリモートコントローラーをジャケットからとりだした。ボタンを押すと、段ボ

ールの中で赤いランプが点灯した。その光は向かい側からは見えない。

「よし、これで大丈夫だ。念のため、明日の昼に確認にこよう」

リモートコントローラーを鮫島に渡していった。

「明日？」

「新課長がどんな人だか、俺だって興味がある」

「そうなのか？」

鮫島がいうと、藪はにらんだ。

「あたり前だろうが。桃井さんがどれだけお前をかばっていたか、これからお前は身をもって知るんだ」

「新しい課長は、俺に嫌がらせをするためにくるわけじゃない」

「そりゃそうだろう。だが、警察ってところは、一度逆らった奴のことは絶対に忘れない。俺ら警察官は、権力者の犬だといわれるけど、警察は権力そのものだ。権力が権力でありつづけるためには、不平分子を決して許さないのが鉄則なんだよ」

藪がいったので、鮫島は目を丸くしてみた。

「いつからそんな『学』を身につけたんだ」

「もういい！ 飯でも食いにいこうぜ。もちろんお前の奢りでな」

6

翌日の午前十時、鮫島は署長室を訪ねた。制服を着けた中年の女性が、署長のかたわらにすわって

いた。副署長の姿はない。

「失礼します」

鮫島がいつて入室すると、女性は立ちあがった。ややふつくらとした体つきで、色が白く髪を顎のあたりで切りそろえている。目が大きく整った顔立ちは、聞いていた五十という年齢より若く見えた。目もとに柔和さがにじんんでいる一方で、口もとには頑固そうな皺があった。

「鮫島警部、こちらが阿坂警視だ」

署長が階級をつけて紹介し、鮫島は両足をそろえた。

「鮫島です」

「阿坂です。よろしくお願ひします」

微笑みを浮かべ、阿坂は頭を下げた。署長にうながされ、鮫島は二人の向かいに腰をおろした。

「忙しいのにすみません。わたしが鮫島さんにお会いしたいと、署長にお願ひしたんです」

阿坂の声はやわらかで、話しかたにもあたたかみがあった。鮫島をまっすぐ見つめる目には自信がこもっている。

「鮫島さんの課長リポートを読ませていただき、本当に頭のいい方なんだなと感心していました」

阿坂がいった。

「恐縮です」

「鮫島さんの経歴を考えれば、当然なのかもしれない」

署長が身じろぎした。鮫島は阿坂の目を見返した。

「職責をまっとうしたいと考えているだけです」

阿坂は小さく頷いた。

「わたしも同じ。二十で四谷警察署の交通課巡査を拝命したときから、ずっと職責をまっとうするのとだけを考えて生きてきました。民間人と結婚し、出産も経験しましたが、そんなわたしに、警視庁はチャンスを与えてくれました。今回、新宿署にお世話になるにあたって、鮫島さんにはご挨拶をしなければいけないと思っただけです」

阿坂の目に強い光が宿った。

『新宿鮫』という名は、いつも聞いていました。新宿には、すごい刑事がいる。キャリア警察官なのに現場にとどまり、どんなに凶悪な犯罪者だろうと、いつもひとりで食いつき、決してあきらめない。まさか自分が、そんな人といっしょに働くことになるとは、夢にも思っていませんでした」

「尾鰭おびれのついた噂です」

阿坂は微笑んだ。

「確かにもっとごつい方を想像していました。この部屋に入ってこられたとき、意外でした。大男だとばかり、思っていたので」

署長を見やっていた。署長は無言で笑みを浮かべた。阿坂の意図をつかめないでいるようだ。

「与えられたチャンスにどう応えるか。三十年間、警察官としてずっと守ってきたことがあります。それを鮫島さんにも聞いていただきたくて、今日、ご無理をお願いしました」

「はい」

「それは、基本を守る。ルールを決して曲げない、ということですが。警視庁は大きな組織で、わたしたちはその歯車のひとつです。ひとつですが、与えられている力は大きく、責任は重い。力の使い方にあやまれば、誰かを傷つけるだけでなく、警察への信頼を裏切る結果になります。世界にはいろいろな警察があって、組織の利益を公務より優先させる警察、権力者を守るために平気で市民に武器を

向ける警察、さらには犯罪組織とあたり前のように手を組む警察すら、存在します。日本の警察はちがう。世界一清潔で、規律正しく、そしてすぐれた捜査能力があります。海外への留学を命じられたときも、わたしは日本の警察官であることを何より誇りに思い、言葉は喋れなくとも、肩身の狭い思いは決してしませんでした」

本心からの言葉なのだろう。目元が赤らんでいた。

「基本を守る。ルールを曲げない」

鮫島はくり返した。

「そうです。新宿署においても、わたしはその信念でやっていきたいと思っていて、先ほど署長にも確認をさせていただきました」

「ご立派なお考えだと思います」

阿坂はわずかに顎をひいた。目元の赤みが消え、口もとの皺に深さが増している。

「鮫島さんも賛同してくださいますか？」

「反対する理由はありません」

阿坂はにっこりと笑った。右手をさしだした。

「ありがとうございます」

鮫島はその手を握った。あたたかく乾いた掌だが、柔らかくはない。

「わたしは警視庁警察官であることを、何より誇りにしています。いっしょに働く方にも同じ思いをもっていたきたい」

鮫島を見つめ、いった。

「警察官であることに誇りをもっているのは、私も同じです」

鮫島が答えると、阿坂は大きく頷いた。

「よかった」

署長が口を開いた。

「話は以上ということでもよろしいですか。鮫島警部には職務に戻ってもらわなければならない。北新宿での監視だったな」

鮫島は頷いた。阿坂の目が動いた。

「何に対する監視ですか」

「じゃぶの小分けをやっている部屋があるとの通報をうけ、実態を内偵中です」

「ひとりで？」

阿坂の声がわずかに鋭くなった。

「ひとりでは限界があるので、カメラを使っています」

阿坂はわずかに息を吸い、いった。

「そうですね。ひとりでは限界があります。それに基本からも外れています」

そういうことか、と鮫島は気づいた。

「確たる証拠がないのに人員を割くのはいかがなものかと考えての上です」

「ひとりでも人員を割いていることにはわかりがありません。それともその通報はガセの可能性が高いのですか」

品のある中年女性といった趣きの阿坂から「ガセ」という言葉がでると、違和感があった。

「いえ、通報者も売人ですので、まちがいないと思います。商売敵を潰すのが目的です」

「ならば、ひとりで捜査にあたるのは考えものではないでしょうか」

「生活安全課は多くの事案を抱えています。対応できるのが私ひとりでした」

阿坂は鮫島の目を見つめた。

「わかりました。いい方法がないか、わたしも考えます」

鮫島は阿坂を見返した。

「それは、今の私の捜査方法に問題を感じておられる、ということですか」

「申しあげました。基本を守る、ルールを曲げない、が私の信念です。単独捜査は、警視庁の基本ではありません」

署長が咳払いをした。鮫島は署長を見た。あきらめに似た表情を浮かべている。

「現場に戻ってください。ここで議論をしても始まらない」

「議論ではありません。確認です」

柔らかいが断固とした口調で阿坂はいった。署長は驚いたように阿坂を見たが、何もいわなかった。鮫島の処遇に関し、よほどのことがない限り、口をだせないということなのだろう。

「失礼してよろしいでしょうか」

訊ねると阿坂が頷いたので、鮫島は立ちあがった。阿坂も立った。身長は一六〇センチを少し超えるくらいだった。鮫島とは十センチ以上ちがうが、決して小さくは感じない。

「ごいっしょでできる日が楽しみです」

阿坂はいった。鮫島は頷いた。

「よろしく願います」

「ご苦労さまでした」

署長がいい、

「失礼します」

鮫島は告げて、部屋をでていった。

7

「どうだった？」

新宿署をでたとたんに藪が訊ねた。二人は徒歩でK S Jマンションに向かっていた。

「信念をもった人だな」

言葉少なに鮫島は答えた。

「どんな信念だ？」

「警察官としての信念だ」

「そんなものは誰にでもある。俺にも、お前にも。形は少しずつちがうだろうが」

あきれたように藪はいった。

「基本を守る、ルールを曲げない、という信念だ」

鮫島がいうと、藪は黙った。無言のまま二人は青梅街道おうめを北に曲がった。北新宿一丁目と二丁目を

へだてる蜀江坂を進む。

「厄介やっかいだな」

やがて藪がいった。鮫島は答えなかった。

厄介だとしても、阿坂を課長と仰ぐのは避けられない。

「ノンキャリア女性警察官の星、といわれているそうだ」

藪がつけ加えた。

本人もそれは自覚しているだろう、と鮫島は思った。あるべき警察官の姿にこだわりつつけることで、今の地位に立った。決して無能ではないし、容姿の端麗さを買われただけでもない。

優秀で美しく、何より警察に忠誠を誓っていて、そこに一点の曇りもない。

「理解できる」

鮫島はいった。

「だがお前とは合わない」

「そんなことはまだわからない」

鮫島がいうと、藪は鮫島を見やった。が、

「ま、いいさ」

と息を吐いた。

KS Jマンションがたつ通りに近づくと、鮫島はいった。

「別々にいこう。俺が先に入る」

「了解」

オフィス街でもない道を、白昼、男が二人並んで歩いていたら、気にする者はすぐに刑事かと疑う。スーツにネクタイ姿では尚更だ。

単独捜査が結果を生む理由でもある。

鮫島はKS Jマンションには目を向けず、メゾンクレストに入った。KS Jマンション一階のパーキングは二台の車で満車だ。すばやくナンバーを見たが、どちらも練馬ねりまナンバーだった。

二階に上がり、監視拠点にしている部屋の扉を開けた。

体を低くして窓べに近づいた。KSJマンションの窓のカーテンがすべて開いているのがわかった。「302」「402」ともに、今は無人のようだ。

五分後、藪が入ってきた。

「空いたようだな」

藪の言葉に鮫島は頷いた。

「もしかするとでかけているだけかもしれないが」

「映像を見てみよう」

藪はベランダの窓を開けると、腹這いになった。鮫島は預かっていたリモートコントローラーをさしだした。モニターをのぞきながら、藪はリモートコントローラーを操作した。

鮫島もモニターをのぞこうとした。

「でかい頭が邪魔だ」

「でかいから、お前の役に立つ知恵がいっぱい詰まっているんだ。失敗だ。下まで入ってない」

段ボールの中のカメラをのぞきながら、リモートコントローラーを操作した藪は舌打ちをした。が、不意につぶやいた。

「嘘だろ」

つぶやく。

「どうした？」

鮫島の問いには答えず、首をもたげ、向かいのKSJマンションを見た。やがて訊ねた。

「カメラ、もってるか。双眼鏡でもいい」

「どちらもある」

「だったら双眼鏡だ」

鮫島は双眼鏡を手渡した。藪は立ちあがると、ベランダにでて双眼鏡を目にあてた。

「おい、ずいぶん大胆だな」

K S Jマンションがたとえ無人でも、下の通りを歩く人間から見える。藪は答えず、K S Jマンションの部屋を見ていた。やがて、

「見てみる。『402』だ」

と、双眼鏡をさしだした。

受けとった鮫島は、藪ほど前に立たないよう注意しながら、目にあてた。

焦点が合うと、カーテンの開いた窓と、おかれた二段ベッドが見えた。

「奥のほうだ」

藪がいった。

「奥？」

さすがにベッドの向こうは暗くて、よくわからない。が、じっと見ていると二本の棒のようなものが床に転がっているのがわかった。やがて棒が人間の足だと気づいた。靴下をはいた足の裏がこちらを向いている。足の先の胴体まではさすがに見えない。

「人が寝ている」

「ああ。ベッドがあるのに床だな」

答えた藪が鮫島の体を押しつけた。段ボールからカメラをとりだす。双眼鏡をおろした鮫島に、室内でモニターを向けた。

「見ろ」

リモートコントローラーを操作した。

K S J マンションの正面の窓が映った。

「窓と下と、両方撮るつもりでアングルを欲ばったら失敗した。上に片寄って、玄関まで写せてない」

藪が説明した。言葉通り、「302」「402」の窓は画面の上半分映っているが、一階の玄関付近はペランダの手すり邪魔していた。

「だがな」

藪はいつて映像を巻き戻した。夜間の映像だった。表示されている時刻は、午前一時二十分だ。一昨夜はついていた「302」号室の明りは消え、カーテンが閉まっている。「402」号室も同様だ。

その「402」のカーテンが開かれた。部屋は暗いままだ。窓の奥に動く人影が一瞬、見えた。

「カーテンを開けた」

鮫島はつぶやいた。

「妙じゃないか。夜なのに明りもつけず、カーテンだけを開ける。だが問題はその後だ」

藪がリモートコントローラーを操作した。映像が早送りされ、午前二時のところで、画面に光が走った。

「何だ？」

「今、巻き戻して、スローで見せる」

まっ暗なK S J マンションの「402」の窓の奥で光が放たれ、一瞬、室内が浮かびあがり、すぐ闇に沈んだ。

「何か光ったな」

「その結果が、あれだ」

藪の表情は真剣だった。

「ちなみに音はしていない」

藪はもう一度映像を巻き戻し、今度は普通速で再生した。

映像の中は静かだ。車のエンジン音が遠くから海鳴りのように聞こえる。暗いマンションの窓や下の通りからは何も聞こえない。

光が走った。藪が再生を止めた。

「つまり？」

鮫島は藪を見つめた。

「サブレッサーをつけた銃を使った。サブレッサーは、音速以下の銃弾に有効で、かなりの減音効果が見こめるが、銃口から噴き出す火までは隠せない」

藪は答えた。鮫島は「402」号室を見つめた。

「誰かが撃たれたってのか」

「そして死体が転がっている」

「待てよ」

にわかには信じられず、鮫島は首をふった。

「あの部屋にいる奴が撃ったのか、撃たれたのかは、わからない。とにかくカーテンを開けたまっ暗な部屋の中で、誰かがサブレッサーつきの銃を撃ち、床に転がっている人間の足が見える」

藪がいった。鮫島は藪の顔を見つめた。銃器に関する知識では、藪は警視庁一、といわれている。

「もう一度映像を見せてくれ。あと音量を最大にして」

「イヤフォンで聞け」

藪がカメラにイヤフォンをとりつけ、鯨島は両耳にはめた。

車の音、どこかの部屋でついているテレビの音声も聞こえる。そして、光が放たれた瞬間、ボンという小さな破裂音がした。

「小さいが、ボンと聞こえた」

耳から外したイヤフォンを藪にさしだし、鯨島はいった。同じ部分を再生し、藪は頷いた。

「まちがいない。銃声だ」

「確かか」

「音も光もエネルギーの一種だ。銃口から弾丸や炎とともに放たれた銃声は、拡散しながらも正面に向かう。この窓の正面奥はおそらく玄関で、銃は室内に向けて発砲された。だから光があそこまで鮮明に写りこんでいる。同じように銃声も、銃口の正面方向にあるこのカメラが拾った。窓が閉まっているんで、このていどだったが、開いていたらもっと大きい音が録音された筈だ」

「じゃあKSJマンションの他の部屋からははっきり聞こえたのじゃないか」

「隣の部屋に人がいれば、まちがいはなく聞こえた」

「『302』はどうだ？」

藪は首を傾げた。

「聞こえたらうが、眠っている人間を起こすほどの音ではない。いったように、正面におかれたこのカメラですら、このていどの音しか拾っていない」

「撃たれたのは、室内にいた人間、ということか」

「おそらく。自殺の可能性もある」

「自殺？」

鮫島は訊き返した。

「『402』の人間は部屋をまっ暗にしていた。もし訪ねてきた人間に撃たれたのなら、部屋をまっ暗にはしておかないだろう。前もって訪ねてくるのがわかっていたら、いけばもちろんだし、いきなりこられても、まず明りをつける。そうはしてはいけないところを見ると、暗い中、自分に向け発砲したのかもしれない。自殺なら、明りをつけなかった理由も何となく理解できる」

「どんな理由だ？」

「決心が鈍る」

鮫島は息を吸いこんだ。寢室の暗い天井を見つめながら、自殺を考えたことがあった。明りをつけた瞬間、死は遠ざかった。

「カーテンを開けたのは、この世の見納めのためか」  
藪は頷いた。

「現場を見ない限り、何ともいえないが」

「いってみるか」

鮫島は藪を見つめた。

「手袋は？」

「ある」

二人は現場検証用の手袋をはめ、メゾンクレストをでた。まっすぐ向かいのKSJマンションに入る。建物の中は静かだ。

階段を四階まで上がった。不審を感じるような品は、階段にはない。

階段をあがって手前の部屋が「402」だった。銀色の番号錠が扉のノブの上についている。鮫島はまず扉のかたわらにあるインターホンを見た。藪が小声でいった。

「ボタンは駄目だ。指紋を消しちまう」

インターホンのボタンは小さく、手袋をした手で押すと、残されている指紋を消してしまう可能性がある、という意味だ。

「わかった」

鮫島はステイルの扉をノックした。藪はしゃがみ、番号錠の箱を観察している。

「ごめん下さい」

もう一度ノックをしたが、返事はなかった。

「なるほど。暗証番号式の補助錠だな。テンキイで設定した番号を押すと、サムターンのつまみが回せる。配線不要のあとづけタイプだ」

藪がいった。銀色の箱には縦二列に全部で十二のボタンがついている。左側の列が「1」から「5」と「A」、右側の列が「6」から「0」までと「B」で、ボタンの下に丸いつまみがあった。

「どういう仕組みだ？」

「おそろくだが、四桁か六桁の番号を設定し、このつまみでサムターンを回す。番号がちがうと、サムターンは回せない。開けるのも閉めるのも、外からは番号の入力が必要だ」

「オートロックじゃないのか」

「それだと電気を使うが、これはちがう」

手袋をはめた手で、藪は慎重にドアノブをつかんだ。

「警察の者です、失礼します」

声をかけ、ドアノブを引いた。鍵はかかっておらず、ドアは外に向かって開いた。うつ伏せに倒れている男の姿が見えた。三和土にある黒い革靴の上に顔を伏せている。薄い青のワイシャツにグレイのスラックスをはいていた。血が匂った。藪は鮫島をふりかえった。鮫島は藪と体の位置を入れかえ、手袋を外した手を、倒れている男の首にあてた。

動脈の位置を探るまでもなく、その冷たい肌で死んでいるのがわかった。

8

夜の十時を過ぎてようやく、現場検証が一段落した。

死亡していたのは、推定年齢三十代から四十代のアジア人男性で、胸部左寄りに正面からうけた銃創があり、それが死因となったと考えられた。詳細は、監察医務院での解剖の結果待ちだ。

室内に男性の上着と思しい背広があり、現金十二万円が入った財布もいっしょに見つかったが、クレジットカードや免許証等、氏名や身分を証明する品は一切なかった。

現場から銃は発見されず、検視の結果、殺人である可能性が高まり、初動捜査は警視庁捜査一課第二強行犯二係が担当することになった。現場管理官は津田警視で、検証後、鮫島と藪は新宿署で事情聴取をうけた。

事情聴取には、新宿署刑事課長の児嶋と捜査一課の二係係長も立ち会った。係長は久米という警部で、以前、新宿署組織犯罪対策課にいた。

死体発見に至る経緯を、まず鮫島が説明した。浦田による密告をきっかけに、KSJマンションを

監視対象にし、カメラの設置に藪の協力を仰いだことを話す。

その映像の確認をおこなったところ、銃火と思しい閃光が録画されており、さらに「402」号室の中に倒れている人間らしき姿が見えたので、現場に立ち入った旨を、藪が告げた。

「令状はとりませんでした、適切な行動であったと考えます」

鮫島はいった。

「そこに疑いはもっていない。カメラがあつたなら、帳場をたてるまでもなく、ほしを見つけられると考えていいのかね」

津田が訊ね、鮫島と藪は顔を見合わせた。

「それが——」

藪がいかげ、鮫島はあとをひきとった。

「私の責任です。室内と建物の出入口と、両方を写してほしいと頼んだのですが、結果として窓しかとらえられませんでした」

「いや、欲ばつたのは俺です。両方いけると思っていたのが、出入口はベランダの手すりが邪魔をして写せていませんでした」

藪がいった。

「すると犯人の映像はない？」

津田が訊ねた。二人は頷いた。

「カーテンは開いていたな」

久米がいった。

「その通りです。映像を分析すればわかると思いますが、発砲の約四十分前に、『402』にいた人

物がカーテンを開けています。ただし部屋は暗いままでした」

藪が答えた。

「現場の部屋にいた人間が明りを消してカーテンを開けたということか？」

津田が訊ねた。

「そうではなく、ずっと暗いままの部屋のカーテンを開けたのです」

「意味がわからないな。部屋にいたが明りをつけず、カーテンを開けたのか」

「その通りです。ただし、いつから部屋にいたのかはわかりません。昼間からいたとしてもカーテンは閉まっています。ただ暗くなつてから明りをつけた形跡がないのです」

「それはこういうことか。部屋にいた者は、カーテンを閉めているのに明りをつけず、発砲の起きる四十分前にカーテンだけを開けた」

「あるいはその直前に入室したのかもしれませんが。外からやってきて現場の部屋に入り、明りをつけることなく、カーテンだけを開いた」

藪は答えた。

「君らの監視に気づいて、明りをつけなかったのではないか」

久米が訊ねた。

「そうなら、カーテンは閉めたままでもいいだろう。明りをつけずにカーテンを開く理由にはならない」

津田がいった。

「しかも、おそらくですが犯人が部屋を訪ねてきたときも、明りはつけていません。暗い中で扉を開け、その場で撃たれた可能性が高いと思われます」

藪がつけ加えた。久米が藪を見た。

「藪さんはそっちの専門家だ。どう見る？」

「推測しかできません」

「いいよ、聞かせて下さい」

「犯人は減音装置付きの銃を使用しています。録音された銃声からも、それは確かです。午前二時、扉に鍵がかかっていたかどうかは不明の『402』を訪れ、室内にいた人間を玄関先で撃った。発砲は一発で心臓に命中し、被害者はその場に倒れ死亡した」

「マル害はなぜ明りをつけなかった。不意に現れたとしても、まずは部屋の明りをつけるだろう」  
久米がいった。

「理由はいくつか考えられます。まず、明りのスイッチがどこにあるかを知らなかった。現場となったマンションはおそらくヤミ民泊で、被害者はそこを借りていた可能性が高い。そこでとっさに明りをつけられなかった。ただしその四十分前から室内にいたことを考えると、これはやや考えにくい。ふたつ目の理由は、あえて明りをつけていなかったというものです。監視を警戒したのか、狙撃を恐れていたのか、外部からのぞかれないように明りをつけなかった。犯人がきたときも明りをつけなかったのは、その予定だったから、と考えます。つまり暗い室内で訪ねてくる人間を待っていた」

「なのにカーテンを開けた理由は？」

「合図です。在室している、と外部にわからせるための。カーテンを閉めたまま明りをつければすむことですが、その方法はとらなかった。理由は、我々の監視を警戒していたからかもしれない」  
「監視に気づかれていたと判断できる兆候はあったのか？」

津田が訊ねた。鮫島は首をふった。

『402』はその前々日の夜、明りがつきカーテンは閉まっていた。カメラを設置したのは翌日、つまり昨日の夜でしたが、そのときはカーテンが少しだけ開き、明りは消えていましたので無人だと判断しました」

「カメラの存在を発見された可能性は？」

「それはおそろくない、と思います。段ボールを使ったカムフラージュを藪さんが施していましたので」

「だが、マル害の行動は明らかに外部の監視を警戒したものだ。マル害が、監視対象だったネタ元という可能性はないのか」

「少なくとも阿曾ではありません。私は会ったことがあります。阿曾は五十を超えていますし、エンコを詰めています。マル害とは一致しません。ただその下のしきてんであつた可能性はあります。小分けを明日か明後日やるので、あのマンションが張られていないか確かめようとしていたのかもしれない」

久米がいった。

「なるほど、それなら明りをつけなかった理由にはなる。つければ部屋にいるようなものだ」

「しきてんが殺された理由は？」

鮫島は訊ねた。久米は首をふった。

「そこまではわからない。しやぶをめぐりいざこざか」

「ほしはプロです。しやぶのいざこざでネタ元のしきてん風情を殺すのに、プロはでてこんでしよう」

ずっと黙っていた刑事課長の児嶋がいった。

津田が唸り声をたてた。

「マル害の身許がわかるものは他になかったのか。携帯電話は？」

「上着の中にありました。プリペイド携帯で、本体に登録された番号はなく、発信、着信とも二つの番号しか履歴がありませんでした。どちらも携帯電話で、現在、所有者を調べさせています」

久米が答えた。津田は深々と息を吸いこんだ。

「財布には現金だけ、携帯はプリペイドで、かけるのもかけてきたのも二人しかいない、ということか。何者なんだ」

全員が沈黙した。

「明日、捜査員を一階のコインパーキングの会社とKSJマンシヨンの所有者のもとに向かわせます。コインパーキングのカメラに、マンシヨンに出入りする者が写った可能性はありますし、KSJマンシヨンの所有者から民泊業者、民泊業者からマル害の身許がたぐれるかもしれません」

久米がいった。

「身許のわかるような品を一切もっていないかったということは、わざとそうしていたのではないでしょう。たとえば、しゃぶ屋に潜入中の麻取だったとか」

児嶋がいった。

「麻薬取締官だとすれば、正体がばれ、消されたという可能性はあります」

久米が頷くと、津田の顔は険しくなった。

「消したのは阿曾か」

「とは限りません。以前つかまり、恨んでいた者に殺られたのかもしれない。たまたまあのあたりで

見かけ、仕返しのチャンスだと考えた。情報を渡すとかいって、カーテンで合図をさせ、マル害がひとりのところを狙った」

「麻取ならF I S（警察庁刑事局鑑識課指紋センター）に指紋の登録がある筈です。明日には照合の結果がでます」

久米がいった。

「麻取だったらおおごとだ。いずれにしてもマル害の身許が判明しないことには、ほしの絞りこみは難しい」

津田は息を吐き、鮫島を見やった。

「きっかけは君だ。意見を聞こう」

鮫島は首を傾げた。

「おっしゃる通り、マル害の身許が判明しないことには、筋が読めません。ただ減音装置つきの銃など、そのあたりのマルBやしゃぶ中がもっているものではありません。しかもほしは暗い中、一発でマル害を仕留めている。児嶋さんがいうようにプロか、それに近い人間です」

「それに近い人間とは？」

「軍隊、それも特殊部隊などにいた者です」

鮫島は藪を見やった。

「どう思う？」

「減音装置は、軍用を除けば、アメリカでも簡単には手に入らない。だが知識があれば自分で作ることも可能だ」

藪が答えた。

「そんなもの、自作できるのか」

久米が訊ねた。

「銃口に金属管を固定し、減音材となる布やクッションを巻きつけ、ひと回り大きい金属管でおおうだけで、かなりの減音効果がみこめます。さらに凝るなら、弾丸の火薬量を減らしてスライドの後退を止めれば、排莖口から銃声が洩れるのも防げます。そうすれば薬莖が排出されないので、現場から見つからなかったのも理解できます。暗い中、銃からとびでた薬莖を拾うのは簡単ではありません」

「わざと作動不良を起こすということか？」

久米の問いに藪は頷いた。

「銃口に減音装置をつけ、装薬を減らした弾丸で排莖をおこなわない拳銃は、米軍などの特殊部隊が使っています。そういった知識をもつ者なら、音速を超えない弾丸を使う拳銃に限って、自作できません」

「音速を超えない？」

「自衛隊や警視庁でも一部に貸与されている九ミリ拳銃は、弾速が速いので、減音効果が期待できません。解剖の結果待ちですが、ほしは弾速の遅い銃を使ったと思います」

「そういう細工ができるのは、どんな奴だ？」

津田が訊ねた。

「鮫島がいったように、まず特殊部隊あがりの外国人。日本人なら、海外で銃の知識と経験を得たような人物です」

「どちらにしてもプロということか。阿曾は元栄勇会だったな」

津田が久米を見た。久米は頷いた。

「栄勇会がらみで過去、プロの殺し屋が関与したと思われる発砲事件はあったか？」

「ドア撃ちなどはありませんでしたが、人を狙った、それもプロらしき発砲はありません」

「栄勇会は屋台骨だった幹部の吉田よしだが自首し、服役してから勢いがあります。以前は中国から直接クスリを仕入れるルートをもっていました、鮫島さんに潰された」

児嶋がいった。

「直接仕入れるルート？」

津田は鮫島を見た。

「『金石』というグループです。金の石と書きます。中国残留孤児の二世三世の互助会から派生しました。『金石』は陸永昌ルイヨンチャン、別名樫原等かしはらひとしという中国人からクスリを仕入れ、栄勇会に流していました」

「樫原——。例の桃井さんの事件の樫原か」

久米が目をみひらいた。鮫島は無言で頷いた。

「そのグループと阿曾とのあいだに関係はないのか」

鮫島は首をふった。

「桃井さんの件があったので、栄勇会の吉田は自首し、私を殺そうとして失敗した陸は日本から逃げました。その結果、『金石』と栄勇会の関係も切れています」

「完全に切れたという確証はあるのか？」

津田が訊ねた。

「陸がネタ元で、『金石』はいわば商社です。別の筋を見つけない限り、栄勇会はネタを引けません。それを仕切っていたのが吉田で、吉田は『金石』による元暴力団組長夫婦殺しを供述しました。それ

によって『金石』のメンバーが千葉県警に逮捕されています」

「売ったということか。吉田は『金石』を」

「そうです。出頭の際、吉田は家族の保護を私に頼みました。『金石』は裏切り者を、その家族も含めて許しません。そのため、今なお、実態をつかむのが困難です。逮捕されたメンバーも、完全黙秘を通し、有罪判決をうけられました。それは、グループについて話せば、自分たちの家族に累が及ぶと考えたからだと思います」

津田の表情が暗くなった。

「マル害が栄勇会の関係者で、『金石』による報復をうけた可能性はどうだ？」

「『金石』が報復に動くとするれば、吉田に近い人間です。マル害がそうならば、可能性はありますが、吉田に弟はいませんし、息子はまだ中学生です」

鮫島は答えた。

「その陸という中国人ではないのだな？」

「ちがいます。陸に私は会っています」

桃井が撃たれる直前、「松毬<sup>マツカサ</sup>」というスナックで、鮫島は陸に会っていた。まだ三十に手が届くかどうかという年齢に見えた。だが鮫島が刑事だと知っても落ちつきはらっていたし、翌日は中国人の殺し屋を自宅近くにさし向けてきた。殺し屋は鮫島を取材しようと張りこんでいた週刊誌の記者を誤射し、鮫島に逮捕された。記者は重傷を負ったが命をとりとめた。

「陸が不用意に新宿に足を踏み入れるような愚を犯すとは思えません。それに——」

鮫島はいいかけ、黙った。

「それに何だ？」

鮫島は全員の顔を見回した。

「陸は、内調の下部機関の情報提供者でした」  
「内調」

久米が絶句した。

「どうして知っている？」

津田が鮫島を見た。

「申しわけありません。それはお答えできません」

香田こうだは今も出向先である「東亜通商研究会」にいるだろう。「金石」と桃井を狙っていた樫原しげる茂を  
つなぐのが陸だという情報をくれたのは、鮫島とキャリア同期の香田だった。

目を伏せた鮫島に、津田は何かを察したのか、いった。

「君ならではの情報源があるのだな」

鮫島は黙っていた。

「いいだろう。とにかくマル害の身許の特定が最優先だ。帳場をたてるかどうか、一課長や理事官に  
相談するが、それまで君にも協力を頼みたい。いいかね？」

「了解しました」

「君は君のパイプを使ってくれないかまわない。そのかわり入った情報はすべてあげてくれ。こちらも  
わかったことは知らせる」

津田の言葉に、鮫島は頷いた。

警察庁刑事局鑑識課指紋センターのコンピュータ、FISに、KSJマンシヨンの「402」で死亡していた男性と一致する指紋の登録はなかった。被害者は司法警察職員ではなく、逮捕歴もない、ということだ。

KSJマンシヨンの登記上の所有者は「呉竹宏<sup>ひるこ</sup>」だった。毎年の固定資産税は「呉竹宏」によって支払われていたが、登記簿上に記載されていた住所、KSJマンシヨンに住んでいないことが判明した。

それはつまりKSJマンシヨンの事実上の所有権が呉竹宏から、暴力団などの反社会的勢力に移った可能性を示唆していた。

登記簿の書き換えをおこなえば、新たな所有者が反社会的勢力に属する者かどうかが確認が必要となるし、もし反社会的勢力に属する者と知った上で書き換えの手続きに協力すれば、不動産業者、司法書士などにも罰則の適用がある。それを避けるため、あえて所有者を「呉竹宏」のままにしておいたのだ。

呉竹宏が賭け麻雀の負けを清算するためにKSJマンシヨンを奪われたのは明らかだった。殺されてはいないかもしれないが、訴えなどを起こせないような状況にあるのだろうと鮫島は思った。

KSJマンシヨンの事実上の所有者である反社会的勢力——暴力団の下で働かされているか、わずかばかりの「名義使用料」の支払いと引きかえに黙らされている可能性もある。

それは暴力団がからめば、十分ありうる話だった。被害者である呉竹宏が、喜んで名義を貸してい

るのだ。

それはこんな絵図だ。

賭け麻雀によって莫大な借金（もちろん違法で、支払う義務はない）を負った呉竹宏に対し、貸し主である暴力団員は当初、厳しい督促はしない。「遊びの銭だから、余裕のあるときに払ってくれりゃいいですよ」といった調子だ。

が、それが一定期間を過ぎたとき、「いろいろと組の状況が変わりましてね。急ぎで大きな金を作らなきゃならない。あんたを当てにしろ、と周りにはいわれるんですが、それは心苦しい。ですが、こうも切羽詰まったら、頼る他ないんです。うまくいかないと、俺は指を詰める羽目になっちまう。どうにかありませんか」

これをつっぱねるのは容易ではない。なぜなら呉竹には、これまでは督促されず、それにアグラをかいて借りを払わなかったという負い目がある。

だが、あくまでも、「今さら払う金なんかない」と図太くふるまったとしよう。たいていの場合、貸し主の「弟分」というのがでてくる。

「兄貴はあんたのことが好きで、組うちからいろいろいわれても、ずっとかばってきたんだ。なのに困ってる兄貴を、あんたが助けないというのなら、舎弟の俺が黙ってない。覚悟はいいか」

呉竹が恐怖を感じたところで、貸し主の暴力団員から提案がある。

「名義は呉竹さんのままでいいから、お持ちの建物を俺に預けてくれませんか。いい商売の話があるんです。うまくいけば、貸しを棒引きできる上に、むしろ使用料が入る。ただそうするには建物を明け渡してもらわなきゃならないんですが、そのための仕度金は用意します」

名義をかえなくていいという言葉に、呉竹は安堵する。名義さえ自分のままなら、知らぬ間に売ら

れてしまう心配もない。そこでいくらかの金をもらい、用意された部屋に引っ越しをする。

名義をかえないのは、暴力団側にとつても、規制されている「反社会的勢力による不動産取引」がバレないというメリットがある。所有権が移れば、その手続きをおこなう行政書士や司法書士には、暴力団排除条例にしたがう義務があり、取引に反社会的勢力が加わっていると知った上で作業に關与すれば、処罰をうける。それは金融機関も同様で、反社会的勢力に属する者は、口座開設もできず、その結果、公共料金の支払いにすら苦慮する状況を生んでいる。

むろん、高額な謝礼とひきかえにあえて条例違反に手を染める者もいる。暴力団排除条例は、基本的人権の侵害だと主張する弁護士もいるほどだ。排除される側からすれば、「やくざは人間じゃないということか」という気持だろう。

それが狙いなのだ。暴力団員をつづけられない生活に追いこみ、足を洗わせる。

が、現実には、カタギでありながら、暴力団員と何らかわらないシノギをおこなう地下犯罪者を作りだす結果を生んでいた。

K S J マンションはこうして実質の所有権が暴力団に移り、傘下の内装業者によって民泊用の建物に改装される。名義上の所有者が自分たちではないのだから、当然、合法的な営業など考えていない。当初からヤミ民泊として開業する。

万一摘発をうけた場合、矢面に立つのは所有者の呉竹宏だ。そのときにべらべら関係者の名を喋らせないために使用料が支払われ、移転もさせられている。借金のとりにたてから解放され、さらに金までもらっている呉竹は、恩義を感じこそすれ、進んで警察に協力することはない。

暴力団によるカタギのとりにこみは、昔も今もかわらない「アメとムチ」だ。金を与え、保護をうたい、逆らおうものなら生命をおびやかす。ただその方法が昔より巧妙になり、カタギの側に、「利用

されている」というよりむしろ「助けてやっている」という優越感を与える仕組が多くなっている。そうと知らずに暴力団にとりこまれるのではなく、自らかかわって協力者になるのだ。それもまた暴力団排除条例のもたらした変化だった。

呉竹宏の現住所は、生きてさえいれればいずれ判明する。

問題はKSJマンシヨンの「402」号室で射殺された男の身許が判明しないことだった。

男が着ていたスーツ、シャツ、下着類はすべて、日本の量販店で売られている品で、携帯電話は、他人の身分証を使って購入した「トバシ」だった。その携帯電話に記録が残っていた二本の番号も、同じく「トバシ」であることが判明した。

「トバシ」の携帯をもち、そこに記録された番号も「トバシ」であるとなれば、被害者の男が犯罪に関与していた疑いは濃厚だ。

KSJマンシヨンの「402」号室とその周辺からは、指紋や毛髪など大量の遺留物が見つかった。KSJマンシヨンがヤミの民泊施設として使われていることを考えれば、これは当然といえた。それから採取されたDNAと、犯罪歴がある者のDNAの比較がおこなわれることになったが、結果がでるまでに時間がかかる上、犯罪特定の決定的な証拠とはならない可能性があった。

過去、KSJマンシヨンに出入りしたことがあるからといって、「402」号室の殺人に関与したとは限らないからだ。

「ありやあいってものじゃない。多すぎても困るんだよ」

二日めの現場検証に立ちあった鮫島に、本庁の鑑識課員がぼやいた。「402」号室だけでなく、廊下や階段、玄関の扉などで採取された指紋や毛髪類は、ざっと数十人分ののぼりそうだった。その中に犯人のものが含まれているかどうかはわからない。

「402」号室の扉付近から採取された指紋は、大半が被害者のものだった。犯人が玄関口で発砲したことを考えると、室内に指紋を残している可能性は低い。

減音装置サプレッサーをつけた銃を使用するほどの犯人が、指紋を残しているとも思えない。したがってK S J マンション内で採取された指紋が犯人を特定する証拠にはならないだろうと鮫島は考えていた。

署に戻ると、監察医務院から戻ってきた藪と会った。

「弾丸は？」

「でた。砕けた複数の破片が体内から見つかった。集めて重さを量ったんだが、おそらく七・六五ミリ口径の拳銃弾だ。インチで表すアメリカ式に言えば、32口径ということになる。この口径の自動拳銃は、アメリカを始めとして中国、イタリア、世界各国で作られている。入手が特に困難という銃じゃない」

「32口径」

鮫島はつぶやいた。貸与されているニューナンプよりもさらに小さい口径ということだ。

「それでも一発で人は死ぬのだな」

つぶけると、藪は頷いた。

「弾丸はマル害の右心房に命中し、破裂させた。心臓の位置は、胸の中央よりやや左だが、左を狙いすぎると外す。ほしはそれをわかっていたのか、胸の中心を撃ち、一発で仕留めた」

「プロなら、とどめを刺すのじゃないか」

「相手が武装していたらそうするかもしれないが、マル害は丸腰だった可能性が高い。出血からして、命をとりとめることはないと判断したのだらうな。そっちは何かでたか」

「すぎだそうだ。遺留指紋だけで、数十種類あるらしい」

「どうせ全部外れだ。こんなほしが指紋を残す筈がない」

藪も鮫島と同じ考えだった。

「阿曾の指紋はでるかもしれないぞ」

「だからって阿曾がほしということにはならないだろう。たまたまあの部屋に出入りしたというだけで。たとえほしだったとしても、マル害との関係をつきとめられなけりや落とせない。マル害の身許がわかるまではひっぱれんさ」

藪の言葉に鮫島は頷いた。クスリのいざこざで殺人が起きるのは、莫大な金になるような量に関係しているときに限られる。

死んだ男が何キロという覚せい剤をもっていて、それを奪うために殺したというのでもなければ、考えにくい。そしてもしそうなら、男は大物の運び屋だったわけで、記録がない筈はなかった。

「くそ、俺が欲ばらなけりや。ほしが入りする絵が撮れたのに」

藪はくやしげにつぶやいた。

「殺しが起こるとわかっていたわけじゃない。テスト撮影だった。あんたに責任はない」

鮫島がいうと、藪は息を吐いた。

「あとはコインパーキングのカメラだ。角度からして、正面からほしは撮れちゃいないだろうが、何かしら手がかりになる映像があればいいが」

捜査会議で、そのコインパーキングの監視カメラに残った映像が公開された。

犯行時刻と思しい午前二時の一分前、黒っぽいスポーツウエアのフードをかぶった人影がK S J マンションの玄関をくぐる姿が写っていた。斜めうしろからの映像で、顔は隠れている。あたりを気にするそぶりも見せず、画面の外からまっすぐにK S J マンションの玄関に向かっていく。

そしてほぼ五分後に、玄関からでてくる姿が写っていた。カメラから顔をそむけるように横を向いて、画面の外にでた。

「これがおそらく犯人だと思われます。明らかに監視カメラの存在を意識し、顔を写されないようにしています」

マイクを手にした児嶋が説明した。

「犯人の映像はこれだけかと思われましたが、さかのぼって検証した結果、午前一時四十分、こんな映像がありました」

人通りのないコインパーキング周辺の映像が画面に映しだされた。その端を一瞬、かすめたものがある。

「巻き戻して、ストップします」

捜査員から声があがった。それは自転車に乗った男の姿だった。黒っぽいスポーツウエアを着け、フードをかぶっている。それがKSJマンションの前を素早く横ぎったのだ。顔はやはりとらえられていない。

「分析の結果、同一人物であることが判明しました。バスや電車などの公共交通機関は動いていない時間です。ほしは、徒歩や車ではなく、自転車で移動した可能性が高い。自転車なら細い通りを抜けられ、Nシステムにとらえられる可能性も低い。とりあえず現場を中心とした二キロ圏内の防犯カメラをしらみ潰しに当たりたいと思います」

久米があとをひきとった。

「この自転車だが、高価なレーサータイプではないことは、タイヤの太さなどで明らかです。より分析を進め、製造元、販売者の情報が得られたら、報告します。さて、コインパーキングの監視カメラ

には、被害者の映像も残っていません。それをこれからだします。殺害される前日の映像です」

午前零時十分であることが画面に表示された数字でわかった。KSJマンションの玄関をくぐる。スーツにネクタイ姿の男が映った。

鯨島は唇をかんだ。KSJマンションの監視をあきらめてから、わずか二十分足らずのことだ。もう少しがんばっていけば、被害者が明りを消し、建物をでていく姿を見られたのだ。

だからといって被害者の殺害を防ぐことはできなかっただろうが。

「そしてこれが、約二十三時間後、同じ日の夜の映像です」

午後十時五十二分、同じスーツの男がKSJマンションに入っていく姿が写っていた。

「この約三時間後に、被害者は射殺されています。解剖の結果、使用されたのは七・六五ミリ口径の拳銃で、一発が心臓右上部に命中、ほぼ即死であつたろうということです。しかもその拳銃には、サプレッサー、あるいはサイレンサーとよばれる減音装置がとりつけられていたようです。これは犯人を特定するための重要な秘密なので、各人留意して下さい」

津田が口を開いた。

「被害者の指紋はFISに記録がなく、現段階では日本人かどうかも判明していない。ただ現場となつたKSJマンションは、民泊施設と思われ、しかも外国人向けのサイトのサイトでのみ宿泊客を募集している、ヤミ民泊である可能性が高い。これまでの調べで、この建物は過去、『呉竹ガラス店』という店舗兼住宅であつたことがわかつている。登記上の所有者は呉竹宏だが、かなり以前、賭け麻雀の負けのカタに土地、建物の実質的な所有権が奪われたとの情報がある。所有権を奪った者がその建物を民泊施設に改装した。所有者の名義がかわっていないのは、暴排条例に抵触するのを恐れたからだと思われる。つまりKSJマンションの実質的な所有者は、暴力団あるいはそのフロント企業で、それが

さらに『WTS』、もしくは『ウエルカムトウキョウサービス』と名乗る民泊事業代行サービス会社に貸しだされ、民泊施設として使用されているという状況のようだ。『WTS』の実態は不明だが、ヤミ民泊業者であることを考えると、殺人事件の発生をうけて、摘発を恐れ、なりをひそめる可能性もある。一方で『WTS』には、宿泊客として被害者の情報が存在すると思われる。『WTS』自体が、フロント企業であるかもしれず、捜査には慎重を期してもらいたい。この事案に『WTS』が関係しているかどうかは不明だが、いずれにせよ違法行為に手を染めている連中だ。危険を感じれば、潜伏するかもしれない」

手が拳あがった。一課の刑事だ。

「賭け麻雀のメンバーについてわかっていることはありませんか」

津田の目が鮫島をとらえた。

「それについては、新宿署生安の鮫島警部が詳しい。本人から説明してもらおう」

鮫島は立ちあがった。ひそひそ話が会議室のあちこちで始まり、久米が制した。

「静かに！」

「鮫島です。初めに、本事案にかかわった経緯をご説明します」

浦田からの密告ちやくりがきっかけで、K S J マンションを監視対象におき、そのために訪れた「淀橋不動産」で得た情報について話した。

「呉竹宏が賭け麻雀に誘いこまれたのは、百人町ひやくにんちやうにあった千代田荘という麻雀店ですが、これはもうなくなっています。その後、西新宿の『サロン』という会員制の麻雀店に出入りするようになり、そこではひと晩に百万、二百万という金が動いていたようです。その結果、店舗、建物を奪われることになった。『サロン』も現在はなくなっていて、どういった人間が賭け麻雀に加わっていたのかは

不明ですが、マルBが関係していた可能性は高いと思われます。判明しているメンバーは今のところ、北新宿四丁目にあったスナック『パニシング』のマスターで、遠藤という人物だけです。このスナックも今はありません」

鮫島は会議室にいる、約百人の捜査員を見渡し、告げた。半数は警視庁捜査一課の人間だ。好奇心のこもった視線を感じる。

「何かありますか」

誰も手を挙げなかった。鮫島は津田を見た。津田が頷いたので着席した。

久米が口を開いた。

「密告のあったしやぶの小分けと本件が関係しているかどうかは、現在のところ不明だが、捜査に際しては先入観を排除してあたってもらいたい。被害者の国籍すら判明していない。いかなる可能性も考慮し、どんなに小さな情報であっても、上げるように」

百の頭が頷いた。児嶋が立ちあがった。捜査員の編成が発表される。捜査一課、新宿署あわせて百人の捜査員はKSJマンション周辺の地取りと被害者の身許特定、そして「WTS」の実態調査の三つに大きく分けられた。

鮫島は、そのどれにも含まれていなかった。

会議が終わり、出席していた捜査員が引き上げるのを待って、児嶋が鮫島を呼んだ。津田と久米がかたわらにいます。

「あなたはひとりのほうが動きやすいだろうと思って、組みこまなかった。管理官もそれでいいとのことなので」

久米がいい、鮫島は無言で頭を下げた。

「組みたがる者はいないだろうと思ったただけだ。いろいろとあるだろうからな  
いやみには聞こえない口調で津田がいった。

「組んだ人に迷惑をおかけすることになるかもしれないですね」

鮫島は答えた。津田が目をそらした。

「将来を考えれば、若い連中はあなたと組みたくないだろう。うまくいってもいなくても、あなたと組んだということは、人事に記録として残される。何かあったとき、あなたに影響をうけたという理由をつける人間が現れないとも限らない」

「おっしゃる通りです」

「もうひとつあるんだ」

久米がいったので、鮫島は目を向けた。

「本件と関連があるとはつきりするまでは、『金石』の情報を会議にあげたくない。公安ハムネタが絡んでいるとわかると士気にかかわる」

「理解できます」

「マル害が外国人で、公安がらみの事案となれば、捜査の主導権をもっていかれる可能性もある。そのときはしかたがないが、初めからそれを承知で動いてくれとは、いけない」

鮫島は頷いた。

「帳場をたてるかどうかは、もう少ししようすを見てからにしようということになった。それまで新宿署には負担をかけるが、署長も了解してください」

津田がいった。

「まずはマル害の身許特定が最優先だ。大塚も、歯の治療跡から何かわからないか調べてくれたよう

だが、はっきりしないらしい。昔ならともかく、近年は中国も治療技術にほとんど差がないらしい」  
久米が息を吐いた。

「あなたはどうか動くつもりだ？」

津田が訊ねた。

「呉竹宏の周辺をあたるつもりです。『WTS』の背景にマルBがいるかどうか、そのあたりから探れないかと考えています」

鮫島は答えた。津田は頷いた。

「用心してください。どういう筋かはっきりしないうちは、どこでほしにいきあうかわかりません。いきあったとき、ほしがどうするか。逃げるか、とぼげるか、あるいは警察官にも平気で銃を向けるか」

「捜査員には全員、銃の着装を義務づけ、必要ならERT（銃器対策部隊）の出勤もおおぐ。あんたもそのつもりでいてくれ」  
久米がいった。

10

翌朝、鮫島は「淀橋不動産」を訪ねた。KSJマンションで死体が発見されたことを、山口はすでに知っていた。

「ニュースで見ましたよ。殺人ですか？」

鮫島と向かいあうなり、山口は訊ねた。

死体が発見されたとは報道されたが、それが射殺体であることは、まだマスコミに伏せられている。「それを現在調べているところです。とりあえずK S Jマンションの現在の所有者をつきとめたいと思いますして」

鮫島は答えた。

「登記上の所有者は調べましたか」

「呉竹宏さんです」

「え？」

山口は意外そうな顔をした。

「今でも、ですか」

鮫島は頷いた。

「今でも、です。ですが民泊施設への改装がおこなわれたことを考えると、実質的な所有者は別人かもしれません」

「てっきり麻雀のカタでとられたものだとばかり思っていました」

事務服の女性がコーヒーをだし、鮫島は礼をいった。

「その麻雀なのですが、先日うかがった『パニシング』というスナックのマスターの他に、加わっていた人をどなたかご存じありませんか」

「うーん」

山口は天井を見上げた。

「麻雀屋でしか顔を合わせないんで、仕事も知らない、あだな渾名で呼びあってるから本名もわからないって人ばかりだったし、何しろ昔のことですからね」

目を閉じ、考えていた。

「馬淵さんまぶちでタクシーの運転手がいたなあ。あ、でもあの人は亡くなったんだ」

「千代田荘がなくなつたあと、『サロン』に呉竹さんをひっぱっていったのは誰だったのでしようか」「それがエンちゃん。『バニシング』のマスターの遠藤さんだったんですが、もうひとり確かいかな

……」

山口はつぶやいた。鮫島は無言で待った。

しばらく考えていたが、

「駄目だ、思いだせません」

と、山口は首をふった。

「千代田荘や『サロン』に出入りしていた暴力団関係者についてはいかがですか？」

「『サロン』はわからないけど、千代田荘には何人かいましたね。やくざ者といつても、いわゆる博打うちで、そんなにガラが悪いというタイプではありませんでしたけど」

「どこの組の何という者ですか？」

「えーと、ひとりはノミ屋もやってる地回りでした。前歯が片っぽうなくてね、まるでヤーさんには見えない顔の男で。えーと、ヤスさん、ヤストミといった筈です」

「ノミ屋もやっていた、ヤストミですか」

鮫島は手帳を広げた。千代田荘の跡地にたてられたハチマンビルの六階にかつて入居していた小さな組、兼有会の構成員名簿を署の資料室で見つけ、眠れないまま早朝出勤した今朝、手帳に書き写していた。

保富武やすとみたけしという名があった。

「保富武ですか」

「そうです、そうです。同じ組の人間にはタケシって呼ばれてたのを思い出しました。すごいですね、そんな古いこともわかるのですか」

山口は目を丸くした。

「ハチマンビルに入ってた、兼有会という組の構成員だったようです」

「ああ……そうだ。兼有会。そんな名前だった。確かもう、潰れちゃったんですよ」

「廃業届はでていませんが、もう存在していないようです」

「この二十年のあいだに、新宿にあった小さな組は潰れるか吸収されるかして、かなり減っちゃいましたからね。うちの親の時代なんかは、そこら中に事務所がある、みたいな感じでしたけど」

山口は頷いた。

「保富武も『サロン』に移ったのでしょうか」

「いや……。ヤスさんはちがいましたね。一回、そうだな、十年も前か。歌舞伎町でばったり会ったことがありますよ。昼間ですよ。そのときに呉竹さんの話になって、ビルをもってたのはヤスさんたちじゃないのっていったら、うちはちがうって、えらい勢いで怒られて。ちょっと恐かったのを覚えています」

「なぜ怒ったのですか」

「それはよくわからないのですが、『ああいうアコギな真似はしないんだ』とはいつていたな。アコギというのがどういう意味なのかは訊きませんでしたがおそらく……」

「イカサマですか」

山口は頷いた。

「自動車ですから積みこみとかはできないでしょうが、通しはあったのじゃないかな」

積みこみとは自分に有利に牌が流れこむように麻雀牌を積むことで、通しとは仲間だけにわかる符丁などで待ち牌を教えあったり、こっそり牌の交換をすることだ。その結果、通しに加わっていない者は負けてしまう。呉竹宏がその手にひっかかって大負けしたのではないかと、前回訊きこんだときに山口は話していた。

「つまり保富武は、そういう真似はしていない、と」

「というか、あの怒りっぷりだと『サロン』がそういう場であるのを知っていて、自分はそこには加わっていないと聞いたかったのじゃないですかね」

「そういう場？」

鮫島は訊き返した。

「ええ。そのあと私もあつと思っただんですが、店の名がなくて、ただ『サロン』としか呼ばれてなかったことや、会員制だといって、二、三卓しかおけない小さなハコでやってしたことなんかを考える」と、『サロン』てのは要するに呉竹さんの息子さん食うためにわざわざ作った店じゃないかって。

むしれるカモがいるってんで、邪魔の入らないハコを用意して、いかにも高級雀荘だみたいなフリをして、宏さんを誘いこんだのじゃないかと思うんです。『サロン』の他の客は全部グルってわけです。そうなりや通しなんてやり放題だ。そうして宏さんは全部もっていかれた。もしかすると宏さんの他にもそういうカモがいて、別の日に『サロン』でやられていたかもしれない。ヤスさんはそれを知って、アコギだといったのじゃないかな」

「なるほど。博打というより、もはや詐欺ですね、そうなる」と

鮫島がいうと、山口は頷いた。

「新宿といっても、このあたりは昔の小さな商売屋が土地もちになったって人がけっこういます。住んでるあいだは売れないですが、いざ移るハラをかためれば、それなりの金になる。そういう人を何人かむしれば、いいシノギになります。私だって、一歩まちがえれば、『サロン』にひきずりこまれていたかもしれません。ゴルフに気持が移ったおかげで助かったんです。そのゴルフだって、あの頃は裏プロみたいのがいて、腕自慢の中小企業の社長なんかから、高い握りで持ちビルを奪ったなんて話がありましたからね」

「握りというのは賭けゴルフですか？」

山口は頷いた。

「ゴルフも恐いですよ。負けだすと『プッシュ、プッシュ』といって賭け額を倍にしていく。そうなたらカッカしていますから、よけいうまくいかなくなる。球は曲がるしパットは入らない。私なんかまだビギナーでしたから、そういう賭けには加わりませんでした。食いつめたプロゴルファーでやくざの親分の代打ちをしているなんてのが当時はいたもんです」

話がそれそうになり、鮫島は訊ねた。

「その保富とは歌舞伎町のどこで会ったのですか？」

「あそこです、歌舞伎町二丁目にいつときあった、デパートの配送所の向かい。今は駐車場になっちゃってますけど、アダルトショップがあったでしょう？ 裏モノのビデオとか怪しい薬とかを売っていた」

鮫島は頷いた。摘発され、潰れたポルノショップだ。無修整のビデオやDVDの他に規制がかかる前の「エクスタシー」などを売っていた。店長は雇われたカタギだが、実際の経営者は指定広域暴力団稜知会りょうちかいの三次団体である岬組みさぐみの組員だった。岬組は、今も管内に事務所をかまえている。

「そのアダルトショップにいたのですか？」

山口は首をふった。

「で来たところに私がいきあわせたんです。客っていう感じじゃなくて、働いてるのともちがうな。何ていうか、出入りの業者みたいでした」

兼有会が潰れ、岬組に移ったのかもしれない。

「あの店はどこがやっていたのか、刑事さんならご存じですよね」

「摘発され、潰れましたが、その当時は岬組というところですよ」

「え、岬？ ってことは、稜知会じゃないですか」

「詳しいですね」

「不動産屋ですから、自然に詳しくなりますって」

山口は苦笑したが、笑みを消し、あわてて手をふった。

「私はちがいますよ。商売柄、いろいろ知り合うことはありますが、やくざじゃありません」

「本当ですな？」

「本当ですって。うちは長く新宿でやっているんです。そんなんだったら、とっくにお宅のマル暴さんにバレてます」

鮫島は頷き、訊ねた。

「保富は岬組に移ったのでしょうか」

「さあ……。そこまでは。十年ぶりくらいに会って、いきなり『組を移ったの？』なんて訊けませんか」

「その通りですな」

鮫島が苦笑すると、山口もほっとしたように笑みを浮かべた。

さらにいくつか質問をして、鮫島は「淀橋不動産」をでた。本人がいうように商売柄もあるだろうが、山口は新宿の裏事情に通じており、水を向ければいろいろと話を聞けそうではある。が、えてしてこういう人物は、反対方向にもパイプをもち、警察が何に関心を寄せているかを、裏側の人間にも話してしまう傾向にある。親しくなるのは考えものだ。

署に戻りかけたとき携帯が鳴った。浦田だった。

「あそこでホトケさんが見つかって聞いたんですが、本当ですか!？」

鮫島は足を止め、あたりを見た。周囲に人はいない。

「俺も連絡しようと思っていた。今どこにいる?」

「ホトケは誰なんです? 阿曽ですか」

「阿曽ではない。今、身許を調べている」

「殺しなですか」

浦田には隠してもしかたがない。

「そうだ」

鮫島は認め、告げた。

「あんたに写真を見てもらいたい。こちらにこられるか?」

「勘弁してください。そんな。おっかなくて、当分新宿にはいけないですよ」

「じゃあ中野だ。今からいく」

「え? でも……。俺、関係ないし」

「あんたの密告ちっぽで死体が発見されたんだ。関係ないとはいえないだろう」

鮫島は語気を強めた。

「でも……」

「とにかく知っている人間かどうか、写真を見てもらう」

「名前とかわかってないんですか」

「自分を証明するものを何ももっていなかった」

浦田はため息を吐いた。

「わかりました」

J R 中野駅の近くの喫茶店を浦田は指定し、鮫島は向かった。

店の一番奥の席に、入口に背を向けるようにして浦田はすわっていた。不安げな表情を浮かべている。

「この男だ」

捜査員全員に配られた、加工され生きているように見える被害者の写真を鮫島は見せた。浦田はじつと見つめ、首をふった。

「知らない顔です」

「阿曾の周辺で見かけたこともないか」

「ありません。しゃきつとした感じじゃないですか。売人とかに、こんなしゃきつとした奴、いません」

「しゃきつとした感じ？」

鮫島が訊き返すと、浦田は頷いた。

「この写真、本当は死体でしょう。でも何となくしっかりしているように見えるじゃないですか。髪

も短くてさっぱりしてるし、だらしない感じがしない。しゃぶ食ってるような奴は、いくら見た目をきれいにしても、どこか駄目な匂いがします。このホトケさん、しゃぶ中だったんですか」

「解剖では薬物の常用を疑うような結果はでていない」  
「でしよう」

「この番号に覚えはないか？」

死体もついていた携帯電話に記録が残っていた番号を鮫島は口にした。浦田は自分の携帯を確認した。

「俺の電話帳にはない番号です。阿曾とは関係ない奴なのじゃないですか」

「それを今調べている。K S J マンションは、あんたがいつていたように民泊施設で、しかもヤミ営業をしている。被害者はたまたま『402』号室を使っていただけかもしれない」

鮫島がいうと浦田は頷いた。

「きつとそうですよ。けど、これであいつらは使わなくなりますね」

「まだ検証がつづいているから、しばらくは近づけないだろう」

浦田は息を吐いた。

「じゃあパクるのは無理か」

「そうなるな」

「ついてねえ」

浦田は首をふったが、急に身をのりだした。

「でも、この殺しが阿曾と関係あったら、あいつら終わりですよね」

「もちろんそうだが、しゃぶ屋が殺しに手を染める理由は何だ？」

「そんなの、金がらみに決まってるじゃないですか」

「殺しをやっても見合うのはいくらだ」

浦田は鮫島を見つめた。

「弾はじみて奴があるじゃないですか。この人はどんな殺されかただったんです？」

「それは教えられないが、弾みで殺されたのではないようだ」

「そうなんですか」

浦田はうつむいた。

「いや、屋なんてケチな商売です。効いちまつた勢いで誰かを殺やることはあるかもしれませんが、そうじゃなければ人殺しなんて間尺に合わないことはしません。第一、そんな度胸があったら、別の商売してます」

「現場になったマンシヨンについて、何か聞いたことはないか？」

浦田は首をふった。

「あそこで小分けをしてると、なぜわかった？」

「俺の客から売人になった野郎がいるんです。それも卸し元を阿曾に乗りかえやがって。しめあげたら、吐いたんです。あそこで小分けを買ってるって。素人です。前はバツにはまってたんですけど、今は完全なしやぶ中で、注射器ポシンプ使ってます」

バツとはMDMAのことだ。「エクスタシー」「エックス」とも呼ばれている。

「そういや、規制がかかる前のバツを売ってたポルノショップが歌舞伎町二丁目にあったのを覚えてるか」

鮫島が訊くと浦田は頷いた。

「覚えてますよ。岬組がやらせてた店でしょう。バツが大流行したときに、いくらでも買うって話がありました。岬組の上って稜知会じゃないですか、表向きはしやぶ法度<sup>はつと</sup>だけど、バツはしやぶじゃなあってんで、岬組はがんがん売ってました。結局、しやぶだったんですけどね」

MDMAに覚えい剤成分が含まれていることが明らかになり、規制の対象となった。

「そこに出入りしていた保富という男を知らないか」

「前歯の欠けた兄ちゃんでしょう。覚えてます。確か百人町のちっちゃい組にいた——」

「兼有会」

「そう、それです。組が潰れて食うに困って、裏ビデオをやってたんです。まだ今みたいにインターネットでいくらでも見られる時代じゃなかったから、商売になったんでしようね」

「今何をしているか、わかるか」

「ラーメン屋ですよ」

こともなげに浦田は答えた。

「ラーメン屋？」

「ええ。『明け鳥<sup>あけからず</sup>』って、けっこう有名なラーメン屋です。場所は板橋<sup>いたばし</sup>のほうじゃなかったかな。池袋のラーメン屋に弟子入りして修業し、去年独立して、当たったんです。テレビにもでてきて、足を洗った話をしてましたよ」

携帯で検索すると店の場所はすぐにわかった。山口が知らなかったのは意外だが、新宿を離れたことで、アンテナにひっかからなかったのかもしれない。

「いったことは？」

「あるわけないでしょう。俺なんかが顔でしたら、塩まかれますよ。曲がりなりにも足を洗って、カ

タギの商売をしてるんですから」

「客でいけば別だろう」

浦田は首をふった。

「なんでもこつてり系らしいんです。俺はもう、そういうのは食えないすよ」

11

浦田と別れた鮫島はラーメン店「明け烏」に向かった。JRの板橋駅から十分ほど歩いた場所にある。到着したのはちようどランチタイムの営業が終わり、暖簾のれんがひっこめられる時間だった。

「すいません、もう——」

暖簾を手にしたアルバイトと思しい若者の言葉に、鮫島は首をふった。

「いや、保富さんに用があつてきたんです」

若者は店内をふりかえった。暖簾は下げられたが、カウンターは満席で、まだ井を前にしてない客もいる。そのカウンターの中央で、黒いTシャツを着てタオルを頭に巻いた五十代の男が働いていた。

「大将ですか」

「手が空くまで、外で待ちますので」

鮫島は告げた。若者が店に戻り、Tシャツの男に話しかけた。男はこちらを見ることもなく頷き、忙しく手を動かしている。

客のひとりが立ちあがり、店の扉を開いた。濃い脂と煮干しの混じった匂いが鮫島の鼻にもさしこ

んだ。確かに濃厚な味のようにだ。

「並んでるんですか」

声をかけられ、鮫島はふりかえった。眼鏡をかけた小太りの若者だった。目は「明け鳥」に向けられている。

「いや、店の人があつて待つています。営業はもう終わったようです」

「えー」

若者は口を尖らせ、納得がいかないように「明け鳥」の扉を押しした。入ってすぐの位置に食券の自動販売機がある。が、閉店を告げられたらしく、うなだれて店をでてきた。携帯をとりだし、盛んに指を動かしているのは、次にどこにいかうか、探しているようだ。

十分ほどすると、残っている客すべての前に井がおかれ、黒いTシャツの男はカウンターから姿を消した。

「お待たせしました」

店の裏から現れ、鮫島に声をかけてきた。垂れ目で色が黒く、右の前歯が欠けている。

「お忙しいところを申しわけありません。私、新宿警察署、生活安全課の鮫島と申します」

身分証をだそうとした鮫島を男は止めた。

「見りゃわかりますよ。鮫島さんて、あの有名な刑事さんでしょう」

「有名かどうかはわかりませんが——」

「あたしだって元が元だ。『新宿鮫』の名くらい聞いたことがあります」

「保富武さんですね」

男は頷いた。

「そうです。足を洗ってもう何年にもなりません。何ですか」

鮫島を見る目に不安はない。まっとうに生きているという自信があるのだ。

鮫島は微笑んだ。

「北新宿のある建物のことを調べています。今はK S Jマンションという名になっていますが、以前は『呉竹ガラス店』といいました」

保富はまばたきをした。

「呉竹……聞いたことあるな」

スラックスのポケットから煙草をだし、火をつけると、うまそうに煙を吐きだす。

「もうなくなってしまうた千代田荘という麻雀荘で、その息子の呉竹宏さんとよく麻雀をされていたと思うのですが」

「ああ……。なつかしいな。思いだした。千代田荘。ヒロシちゃんね。やった、やった」

保富は笑顔になった。が、すぐそれを消し、訊ねた。

「呉竹のヒロシちゃんに何かあったんですか？」

「連絡先をご存じないかと思って、かつての麻雀仲間の方に当たっているんです」

保富は鮫島を見つめた。

「俺にはぜんぜん心当たりがありませんよ。だいたい千代田荘がなくなってからは、卓を囲むこともなかったし」

「千代田荘がなくなっているから、呉竹さんは別の麻雀クラブに通ったと聞きました。西新宿にあった『サロン』という」

「俺はあそことは関係ありません。あれは——」

いいかけ、保富は首をふった。

「足を洗った人間に面倒な話をさせないで下さい」

「あなたが足を洗い、カタギで立派にやっておられるのは、今、お店を見ていてもわかりました。商売の邪魔をする気はありませんし、迷惑もかけないようにします。呉竹さんがどこにいて、K S J マンションの所有者が誰なのかを知りたいんです」

「そんなの登記簿あげればわかることだ」

「名義は呉竹宏さんのままで、今でもあそこに住んでいることになっています。しかし実際は民泊施設に改装され、ヤミ営業をしています」

保富は宙を見つめ、煙を吐いた。

「そうやってんのか」

と、つぶやいた。

『『サロン』について、ご存じのことがあれば、教えていただきたいのですが』

保富は答えなかった。

「呉竹さんを『サロン』で紹介したのは、『バニシング』というスナックのマスターだったそうですね」

保富は鮫島を見た。

「そうです。エン公、と俺らは呼んでました。カタギの人たちはエンちゃん。あの野郎は、権現ごんげんのいとこなのを隠して、カタギの連中にとり入っていた」

「権現？」

鮫島は訊ねた。権現という組ややくざの名は知らない。